
戦国BASARA 転生！北条物語

ニャンコ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA 転生！北条物語

【Nコード】

N7800M

【作者名】

ニャンコ太郎

【あらすじ】

ある日目覚めたら俺は生まれたばかりの赤ん坊に……ってええ！何で！？しかも転生した先は戦国時代で北条家！？

どうなってんだこれは~~~~！！

そんな俺が戦国BASARAの世界でたくましく生きていくストーリー！。

注：作者の俺的時系列改造アレンジが大爆発しております。アレ？こいつこの時代にいたっけ？って思っても軽くスルーして下さい。

プロローグ

やあ！俺はしがな高校三年生だ。趣味は漫画とゲーム。部活は陸上部！

俺は最後の大会も終わってのんびりとゲームをしながら休日を楽しんでいた。

受験？ハハッ、それは凄い心配だったがやっとな肩の荷が下りたんだ、いつもは部活漬けだった休日ぐらい少しは羽目を外して遊んでも罰は当たらないだろう。

……なんて思っていたら羽目を外しすぎたのか深夜までゲームをしていた所急に睡魔に襲われた……そして……

「おぎやああああ！（なんじゃこりやああああああ！！！！）」

目が覚めたら赤ちゃんになっていました。気付いた原因は体中に感じる違和感、首が動かせない、腕や足をバタつかせても力が入らず立ち上がることはおろか上半身を持ち上げる事も出来ない。

更には声を出そうとしても全てが鳴き声になる……訳が分からない。分かった事は一つ、俺は布にくるまれていて世界がものすごくおつきくなっているという事だけだった。

「ほぎや？おんぎやああああ！（何？どうなってるのこれえええ！？）」

自分に起きているこの理解不能の状況を飲み込めず絶叫（大泣き）している和不意に俺の体を包んでいる布ごと持ち上げられる。そして持ち上げた本人であろう若い女性…多分自分…いやこの赤ん坊（俺）の母親だろう。

うん、美人だね。どことなく漂う清楚な感じが何というか……ステキです。

「ウフフ、起きたのね…よしよし」

そう言つて母親と思われる女性は俺を抱えたままあやし始める。慈愛に満ちた表情でゆっくりと俺をなでる。その優しい撫で方に俺はいつの間にか暴れるのを止め、静かに撫でられるがままになつていた。いつぶりだろうか、こんな感じでなでられたのは……
いかん眠くなつてきた。精神は高校生でも肉体は赤ん坊か……
瞼が重くなり視界がぼやけてくるそして俺が再び眠りにつこうとした瞬間……

「ドドドドドドドド……」

「「 Bannon!」今泣き声が聞こえたぞ！氏時が起きたかあ！」

元氣そうではあるのだがどことなく哀愁が漂う変なおじいさんが襖をすごい勢いで開けて入つて来ました。
肩で息をしているおじいさんは女の人の目の前まで足早に近寄ると大きく息を吸い呼吸を整えた。

「氏政様…時間を考えて下さいませ。まだ明け方です…お騒ぎにならないで下さい」

「いいではないか…ワシは目覚めた孫の顔が一刻でも早く見たいん

じゃよ」

そう言つて氏政と呼ばれたおじいさんは俺を抱く、なんか若干腕がプルプルしてて怖いんですけど、落とさないよね？落ちたら確実に死んじゃいますよ俺？

……眠気？さっきのおじいさんの登場で吹き飛びましたよ？今は不安感で頭の中がいっぱいです。

「おお……可愛いのう……」

そう言つて俺の顔を見てくるおじいさん。ずいと俺の顔にキスしそうな勢いで俺に顔を近づけてくる。

俺が初孫なんだろうか？顔がすごいニヤけている。なんか怖い。

「この戦国乱世の世を切り抜け、この子の子々孫々の代までの北条家の安泰が続くといいがの……」

そう言つて一瞬悲しそうな顔をしたがすぐにもとの顔に戻った。

その瞬間朝日が障子の間から日が差し込んだ……

つて待て！北条家…戦国乱世！？

「おぎやあああああ！（なんだとおおおお！？）」

こうして俺は戦国時代、今まさしく衰退していく北条家の一員として転生したのであつた……

「うおっ！な、何故じゃ？何がいけなかつたんじゃ！？ほーれ泣く
な泣く」「ゴキッ！」「ふぐおっ！」「こここ腰があああっ！」
「う、氏政様！？」

俺の成長、風魔との出会い

しょうせつかさて、俺……いや年齢的にはぼくがこの世界に転生して十ヶ月が過ぎた……早いようで短かった十ヶ月……そして俺はという

「素晴らしいぞ氏時い！お前には北条家のご先祖様の加護がついているに違いなあゲホツゴホツ……オエツ！」

「……おじいさまおちついてください」

「……そうです父上、少し落ち着いて……無理ですよ」

「ああ当たり前ぢやあ直定！こんな……喋って……歩いて走ってるんぢやぞ！何時見ても驚くわい！」

「氏時、何時もお爺様に会いに行くとこうなのか？」

「うん……」

僅か十ヶ月でぼくは喋って走れるスーパーベビーになっていた。

しかも身体能力は運動部だった頃と殆ど変わっていない。我ながらなんてチートだろうと思ったよ。

「……あまりの驚きに何故呼んだのか忘れてしもうたわい」

「父上……毎回自分の部屋に遊びに来るのを見ているでしように」

「しょうがないぢやろ、この衝撃は相応の歳になるまで消えんわい」

そう言ってお爺様はちよこんと座っているぼくを見た。

ぼくの体の変化は突然起こり始めた。まず首がすわるまでの間は他の幼子と変わらなかった……

しかし！変化は首がすわった次の日に起こったのだ……何とぼくは立って歩く事が出来るようになっていた。

これには父上、母上、そして城にいる者全員に衝撃を与えた。そりゃあそうだ、首が座ったかと思っただけなら色々な過程をすっ飛ばして立ち上がったのだ、驚かない訳が無い。

そしてその一ヶ月後、言葉が喋れるようになっていた。気づいたのは朝起きた時にいつもは泣き声だけの挨拶が「ははうえ、おはようございます」と普通に言葉に出来た時だった。直後母上が白目を剥いて気絶したのは記憶に新しい。驚いて父上に報告しに行ったらあんぐりと口を開けて持っていた書簡を落とし数分間そのまま硬直していた。

更に一月前には一般人の小走り程の速度ではあるが走れるようになっていた。

改めて自分の成長っぷりを顧みてみると本当に化け物じみてるなばく……

まあそんな感じで今に至るという訳である。周りからは北条家の天才、神童等と言われた。

城の皆が皆「この子なら弱体化していく北条をどうにか出来るかもしれない」と言ったような期待の目で見てくるので正直辛い。

まだ一歳になつてもいないのにこんなプレッシャーをかけられるとは……色々辛いな。

「うゝむ…忘れてしまつては仕方が無い、帰って良いぞ。手間をかけたな」

「父上……」

「思いだそうとするだけこの年では無駄なことぢやからな。爺が考えているところなんぞ見ていても氏時がつまらないぢやろうからな」

「……そうですな」

「否定はしてくれんのか」

きつぱりというな父上は……ぼくはお爺様の考えている姿を見るの

は別にいいんだけど、考えてる途中に色々な事をしてて見て飽きないし。

父上と揃って部屋を出ようとしたが父上は個人的な話があったと引き留められてほくだけ部屋の外に出された。

そして庭に飛んでいる鳥の数を数えて暇を潰している内にお爺様の話は終わったようで父上が部屋の外に出て来た。

「済まんな氏時、少しつまらなかっただろう？」

「ううん、だいじょうぶだよちちうえ！」

「そうか、では母上の元に戻るとするか」

「はい！ちちうえ」

……次の日、いつものようにお爺様の所に行つてご先祖様の武勇伝でも聞こうかなあ……と思つていとお爺様が黒っぽい服を着た大柄の人物と何かを話していた。

「ん！？ なんじゃ氏時か」

「……………ほう、あれが噂の」

ちらり、と黒い服を着た男がぼくを見た。射抜くような眼光が怖い。目の部分以外は黒い布で覆われており表情までは分からなかったが……………不気味な人だ。

しかしこの人が着ている服装はどう見たって……………

「ヒュッ」

「！」

忍…者……だね。うん、一瞬でぼくの目の前に移動してきた。
じろりとぼくの事を見下ろすすとすっと屈み視線を合わせてくる……
何だろう、色々と探られているような気がする。

「これでまだ生まれて一年も経っていないとは……いやはや驚きですな北条殿」

そう言うと俺の頭をわしゃわしゃと少し乱暴に撫でた。

「おい風魔！」

「おっと……失礼」

お爺様が声をかけると目の前から消えまた先程居た位置へと戻っていた。

瞬間移動って……まるで魔法だな。

「いやはや済みません北条殿、それで…仕事はこれだけで？」

「うむ、報酬は用意しておる」

「そうですか……それでは」

そう言うとお爺様に風魔と呼ばれた男は部屋を出た。

そして俺の横を通り過ぎた時ばくにしか聞こえないような小さな声で呟いた

「今日の昼に中庭に来い……まあ来るか来ないかは自由だ」

「え？」

驚いて振り返るがそこに既に風魔と呼ばれた男は居ず数枚の黒い羽が舞っているだけだった。

「氏時！大丈夫か？あやつに何かされなかったか？」

呆けた顔をして固まっているぼくを見ていたのか少し慌てた様子でお爺様が駆け寄ってきた。

「さっきの人は？」

「あやつは風魔党という傭兵集団の頭首での小太郎と言う者で、代々金で北条に雇われておるんぢや。雇うておるうちは大丈夫なんぢやが……」

「……ふうん」

俺は地面に落ちている黒い羽を拾い上げた。
特にやる事無いし……行ってみようかな。

俺の成長、風魔との出会い（後書き）

人物紹介

北条氏政

腰痛持ちの北条家第四代頭首。

ご先祖様達の輝かしい栄光を背に受け北条氏の領土を最大にした…
…のはいいのだが先代の氏康が亡くなり威光を無くした今は弱体化し各勢力と同盟を結んで自らの土地を守っている状態である。
自慢は戦国一の家族仲、ここまで親族が和氣藹々としている国も早々無いだろう。

北条直定

主人公である氏時の父親。少し前までは和睦の一環として三河の松平家（後の徳川家）に仕えていたが北条家の弱体化で人手不足となった北条家へと戻って来た。
一応それなりに息子が育ったら三河に戻る予定である。

母上

母上は母上です…ハイ。名前？ハハツ、多分作中では絶対名前は出てこないと思います。

とにかく主人公である氏時の母親。慈愛にあふれ優しく、気遣いが出来、お料理もできる、息子と夫をなによりも愛している美しい人

風魔小太郎

風魔党の現頭首。風魔党の頭領は代々小太郎を名乗ることが決ま
っている。

BASARAを知ってる人に言っておくとこの人は“あの”風魔で
はありません。

忍を師に修行をする

さて所変わってここは城の中庭、ぼくは言われた通りここであの風魔の人が来るのを待っていた。

しかしぼくに何の用事があるんだろう？誘拐と言うことも考えたが雇い主の孫を誘拐なんてする筈が思うし危険が無いと判断した。

まあ一番の理由はとてつもなく暇なんだからだけだね。

「「ヒュッ」……来ていたか」

「うん」

風を切るような音がしたかと思うと目の前に先程の風魔の人が立っていた。

……本当にどうやってこんなマジックのような事出来るんだろう。ホントに不思議だ。

「ところでどうしてぼくをよんだの？」

「それはな、君のその一歳に満たない子とは思えない身体能力に少し興味を持ったのだよ」

しゃがんでぼくと視線を合わせて話してくる。

……何ですかその期待したような目は。

「先ずは君の身体能力の限界を見たい。ひたすらこの庭を走り回ってくれないか？無論全力で」

「……え？」

「それでは始めてくれ」

こうして俺の地獄は始まった。

（二時間後）

「ぜえ……ぜえ……」

「素晴らしい、まだ生まれて一年も経っていないとは到底思えん」

ぼく……何で走ってるんだろう？しかも風魔の人は何だか良く分からないが興奮してるし。

ぼくはどれくらい走ったのだろうか？三十週から先は数えていない。でも少なくとも五十週はしたと思う。

「もういいぞ！良く分かった」

「は、はひい」

ぼくはその場に仰向けで倒れる。服が汗でビショビショだ。

しかしこんな走ったのは何時以来だろう。高校の夏、大会に向けて死ぬほど練習した後疲れ果てて同じように倒れて空をボーッと見てた事あったな……

ぼくは青く澄み切った空を見上げながら転生前の事を思い出していた。

「やはり素質はあるな……立てるか？」

仰向けになったぼくの顔を風魔の人が覗き込んできた。

「な、なんとか」

ぼくはふらふらと立ち上がる。

「おっと、気を付けろ…お前には才能がある。強くなりたいんだつたら明日同じ時間にここに来い。分かったな？」

「え？」

「それでは「ヒュッ」」

顔を上げるとそこには既に風魔の人の姿は無く先程と同じく数枚の羽が舞っているだけだった。

「あしたも……か。ところでさいのうつてなんの？」

それに答えてくれる人はもちろん何処にも居なかった。

〳三ヶ月後〵

「よし！氏時よ、もう体力面は心配ない！明日から本格的な訓練に入るぞ！」

「はい！ししよー！」

あの風魔の人に特訓して貰って早三ヶ月。

今やばくと風魔の人との関係は師匠と弟子のようなものになっていた。

「氏時はまだ一歳になって間もないと言うのに…直定様」

「諦めろ、父上が決めた事だ。それに死ぬような事は無いさ。」

「ふおっふお！北条家の未来は明るいのう！」

「ワイワイガヤガヤ」

そして縁側には俺を見ようと集まったギャラリー…というか北条家の皆様。

ぼくと師匠の特訓は秘密と言う訳では無かったので二日目にしてあつさりと見つかった。

その時お爺様は凄まじい剣幕で怒っていたのだが師匠が

「少し私とお話を…」

と言ってお爺様の部屋の中に入って行き少し経つと。

「氏時よ！特訓がんばるんぢやぞ！心から応援しておるからの！」

随分とご機嫌な様子でお爺様が出てきて了承してくれた。

……一体部屋の中でどんな話をしていたのか非常に気になった。

まあとにかくそのお陰でぼくと師匠の特訓は北条家公認のものとなった訳だ。

「それでは北条殿、約束の通り……」

「うむ、頑張るのぢやぞ氏時！」

「辛くても頑張るんだぞ」

「母は何時でも見守っていますからね」

「え？何…」

まるで俺がどこかへ行ってしまうかのような感じで皆が見ている。そう言えばいつもより若干人が多い気が…

「ガシッ」

俺が状況を飲み込めずにいると師匠がぼくの肩を掴んだ。

「今日からお前は私の隠れ家へ行く。そこでしばらくの間暮らすのだ」

「へっ？」

「拒否は出来んぞ氏時。北条殿とはもう話がついているからな」

それでこんなに人が集まってるのか！
って言うか本人に告知無し？なにそれ！

「行く前に親に一言挨拶ぐらいして行け。しばらくは会えんからな」
「あ……はい！ちちうえ、ははうえ！いってまいります！」

父上と母上に向かってそう言った直後、

「ヒュッ」

一瞬で景色が変わり、ぼくはいつの間にか森の中に立っていた。
リアル瞬間移動を体験したぼくはその衝撃にしばらくの間頭がフリーズしていた。

「ほら、何をばさつとしている。ここからは歩くぞ！」

「え……はいししょー」

そう言って俺は師匠の後に付いて森の奥へと入っていった。

その後六年間、俺は超スパルタの忍者修行を受ける事となった……

北条家の日常

時が経つのは早いもんで、ぶくがこの異世界に生まれ落ちてから早七年が経った。

異常とも言えるほど厳しかった師匠の忍者特訓を乗り越え、今は小田原城へと戻ってきている。

そして今俺は何をしているかと言うと……

「氏時様あ！それは皆が昼に食べようと思って大切に仕舞っておいた甘味い！何としてでも返して貰いますぞお！」

「うおっバレたぞ風魔！」

「……………！」

忍者のスキルを無駄に有効活用して家臣の…多田…って言ったかな、とにかくそいつの甘味（饅頭）を盗んだのを見つかって逃げ回っていた。

因みに俺と一緒に逃げているのは俺と同じく師匠の弟子の風魔。

俺が特訓を始めた二年後に師匠の弟子になった奴だ。極端に無口…と言うよりも喋らない奴で、鼻の真ん中から上の部分をバンダナで隠した赤髪の新米忍者だ。正直景色が見えているのか分からないけど、ちゃんと障害物を避けたりしたりできるので見えているんだろう……多分。

「くっつ！子供と言えど忍…仕方ないこうなったら…セイッ！」

「やばっ！あのポーズ……あいつ五色備えだったっけ！？」

「……………」

突然追いかけるのを止め、一昔前の戦隊ヒーローのようなポーズを取る。

良識ある城下町の人々が見たら「なんだこの馬鹿は」的な目で見られる事は間違い無い。

しかし彼は本気でやっているのだ。そしてこのポーズは非常にヤバい。

「来たれ！北上家の栄光と威光を纏いし戦士達よ！」

「ドドドドドドドド……」

「うわ来ちゃったよ……」

多田は天高く拳を突き上げ高らかにセリフを言ったかと思うとその声に反応して“彼ら”が集まって来た。

「黄備え、北条綱成参上！」「シャキーン！」

「赤備え、北条綱高参上！」「キラッ！」

「青備え、富永直勝参上！」「ビシッ！」

「白備え、笠原綱信参上！」「スタッ！」

「そして最後に黒備え、多目元忠あ！」「ピカーン！」

バラバラな位置から出てきたかと思うと全員で一カ所にまとまりそれぞれが違うポーズをとる、ご丁寧に効果音付である。

その手早さから日頃から練習をしている事がよく分かる……おまえらこんな事やってる暇があったら仕事しろ。ばくが言える義理じゃあ無いけどね。

あと多目……ごめん名前間違えてた。

「……北条の平和と安泰を守る五人組！北条戦隊五色備え！ここに参上！」「ドォーン！」……ってあれ？」「……」

「あいつらが阿呆なポーズとってる間に逃げるぞ風魔あ！」

「……」

うん、逃げたよ……いやだって彼らあれでも北条家トップクラスの武将なんだもん！

正直忍術が使えると言っても簡単には逃げれるような相手じゃない。あの阿呆なポーズを取っているときに逃げるのが一番なのだ。

「ああっ逃げられる！」

「だから言っただんですよ振り付けも台詞も長すぎるって！」

「とにかく城の外に出すな！見つからなくなる！」

「……所でどうしてあの二人を追うんだ？」

「私が保管していた我々全員分の甘味を氏時様が取ってしまったのだ！」

「……それは一大事！急いで追わねば！」

「うわぁ！凄い勢いで追ってきたぁ！城の外まで逃げるぞ！」

「……」

「……返して貰いますぞ氏時様ああああ！」

「ふぉっふぉ！騒がしいのう！」

「……そうですな」

氏政は外で騒ぎを起こして逃げ回っている二人をみて笑っていた。普段は表情を全く変えない風魔小太郎でさえも口元に笑みを浮かべていた。

「所で風魔よ、聞こうと思っていたんぢやが……あんな条件を付け

てまで何故氏時を育てようと？跡取りはあの子なんぢやろう？」

氏政が聞くのも無理はない。六年前、氏政に風魔が出した条件というのは氏時を預かっている間は依頼料を無料にするという事だったからだ。

毎回法外とも言える程の高い雇い賃をふっかけてくる風魔がたった一人の育てても何の得にもならない子供のために無料にすると聞いたのだ。氏政が疑問を持つのも当然の事だろう。

「そうですね、強いて言うなら……興味が湧いたからですか。氏時様を見た時に」

「……お主の考えている事は時々分からんわい」

「分からなくてもいいですよ……分からないことが多い方が忍らしい」

「それで？あの跡取りはどうなんぢや？」

「寡黙で覚えが早い……いずれは私を超える忍になるでしょうな」

「ふむ……奴も小太郎の名を継ぐのか」

「多分……いや確実に」

「そうかそうか……それならば氏時とはいい関係であってほしいのう！」

そう言つて茶碗に手を伸ばすと茶をすすった。

話している間に騒ぎは収まったようで風に揺れる庭の草木の音だけになっていた。

騒ぎの元凶だったあの二人は捕まったかはたまた逃げたか……

氏政は茶を飲み干し一息つくとも風魔を見た。すると風魔は無表情の傭兵の顔になっていた。

この顔になったら無駄話は無用。氏政は静かに今回の依頼を風魔に言う。

「……承知「ヒュッ」」

北条家は今日も平和である。

北条家の日常（後書き）

風魔

現在師匠の弟子をしている幼い忍者。

非常に無口……と言うより喋らない。氏時とは修行二年目で出会い
弟子にあたるが才能は風魔の方が圧倒的に上である。小田原城に
帰るまでの四年間一緒に飯を食って寝た仲であり心を開いている……
けどやっぱり喋らない。

ちなみに氏時は風魔が何を言おうとしているのか長年の付き合いで
分かるらしい。

……師匠は分からないのに。

北条戦隊五色備え

北条が誇る強力な武人達による黄、赤、青、白、黒の五色をそれぞれ
シンボルカラーとした五人組だ！

北条家の栄光と威光を背に今日も北条領の平和を守るぞ！

……存在的にネタっぽいけど全員強い。

北条家の日常 その二

ぼくと風魔は何かあの五人組から逃げ出すことに成功した。
そして今ぼく達は城下町の茶屋でのんびりと戦利品である饅頭をほ
おばっていた。

「あれっ？氏時様…それに風魔の子も…二人でなに食べてん…
ってこれ多目が買ってた甘味じゃないですか！」

「よっ！政繁「モグモグ」」

「……「モグモグ」」

「よっ！政繁…じゃないですよ！何やってんですかもっ…」

今ぼくに話しかけてきたのは大道寺政繁。よく小田原城下をぶらつ
…視察している家臣の一人だ。

ぼくが知っている家臣の中では一番若いのでよく話をしている。
イケメンで良く女に声をかけられる北条家のアイドル的な存在だ。
それにさっぱりとした性格で厭味つたらしくないので皆に好かれて
いる。

「茶屋に来て持参の甘味を食うなんて…お茶の一つでも頼まなき
や店の人に失礼でしょう」

「注意するところなんだ…」

「注意しても聞かないでしょう？…あ、おばちゃん茶を三人分お願
いね」

「はいよ」

店のおばちゃんに茶を頼むと俺の隣に座り俺と風魔の間に置いてあ
った饅頭を一つ取ると口に放り込んだ。

「「モグモグ」おつ、美味い！さすが多目の選んだ品、中々の味だな」

「「……………」」

「二人ともそんな目で見ないで下さいよ。お茶代は俺が持つんですから、どうせ二人共金なんて持つてないでしょう？」

その後、ぼく達三人はお茶を飲みながらのんびりとこの茶屋で暇を潰した。

一刻程経った頃にはかなりの数があった饅頭は一つ残らず三人の胃袋の中へと収まっていた。

「それじゃ、俺はやる事があるんで帰らして貰います。くれぐれも憲秀殿には捕まらぬように」

「うん分かってるよ」

そう言つて立ち上がり政繁は城の方へと歩いて行つた。

因みに政繁が言つた憲秀と言つのは家老の松田憲秀の事だ。

絵に描いたようなカタブツで全く冗談というか…融通が利かない。

この前も城下町を歩いている所を発見された時はそれから日が暮れるまで説教された挙げ句夕飯を抜かれた。

…さっきだつて逃げ回っている時に松田が来ていたらどんな説教地獄が待つていた事か……

「うん、ぼくもあの堅物には捕まらない内に「誰が堅物なのですか氏時様？」あ……………」

ぼくもこんな所見つかる前に城に戻ろうと立ち上がった直後、見つかりたくなかつた本人が俺の目の前に立っていた。

……………ああ、政繁も捕まつてる。

「さて、家臣が貴方に甘味を取られたと嘆いておりましたが……まあ話は城でゆつくりとしましょう」

そう言つてニコリと笑う憲秀、笑顔が怖い！怖いよ憲秀さん！そんな笑顔子供に向けるもんじゃないよ！泣くよ？泣いちゃうよ！

「さあ…行きましようか？氏様、そして風魔君も」
「……！？」

そう言つて俺の右腕と風魔の左腕をがっちり握り城の方へと歩き始めた。

いくら俺の身体能力がいいと言っても北条の主軸、文武両道の憲秀の力には逆らえず引きずられていくぼく達。

「諦めましょう氏様、俺も付いてますから…」
「い、いやだあああああ！」

今回のお説教は政繁がまだ仕事が残っているという事で日が沈む頃までの説教は無かったものの数刻は正座のまま説教されていたと思う。

おかげで終わった直後三人とも立ち上がろうとしたのだが数分間は足に力が入らず動けなかった。

「……それは大変でしたね」
「でしょ？」

「でも原因は氏時様でしょう？自業自得というものです」
「うつつ……」

そして今俺は家臣の遠山綱景の所に来ていた。
物腰が柔らかい人なので話しやすく、お爺様の次に良く話をする人だ。

この人は良く茶をたてている………というか茶器を持ち歩いている人なので彼の居る所ではほんのりと茶の匂いがするのでよく分かる。
その雰囲気と茶の匂いで結構いい空間になるのだ。

因みに連歌が好きらしくわざわざ遠方から歌人を呼び自分の屋敷で連歌会を開く程だ。

前に連歌のどこが素晴らしいのか聞いたら一刻は優に話していた。
あれは流石に辛かったな………

「それで氏時様は今は何のお勉強をしているのです？」
「うゝん………文字だね」

この世界には鉛筆やシャープペンシルなどは存在しない。文字を書くのに使うのは………筆だ。

この扱いがまた難しい。この世界で筆を習い初めて一年が経ったが細かい文字が全く書けない。

天才と言われても習って無い事は出来る筈が無い、憲秀も勉強をもうちよつと易しくしてくれればなあ………

「全く上達しない………」

「まだまだ始めて一年でしょう？上手く書けなくて当然。これからじっくりと上手くなっていけばいいだけの事ですよ」

そう言つて綱景は外を見る。そこでは数羽の小鳥が砂浴びをしていた。

「鳥はいいすなあ…自由気ままにこの広い大空を飛べる……旅は、いいものでしょうか？」

砂浴びを終え何処かへ飛んでいく小鳥達。綱景はその様子をじっと見ていた。

「氏様は……この日ノ本でどう生きていくのか………」

どうして小鳥からそんな事に繋がるのだろう。
たまに綱景の頭の中を無性に覗いてみたくなる。

「……おっと、これは失礼、自分の世界の中に入ってしまったおりました」

「別にいいよ……少しここで休ませて貰うね」
「どうぞご自由に」

そう言ってぼくは縁側に寝ころぶ。昼下がりの陽光が何とも心地よかった。

北条家は……今日も平和だ。

北条家の日常 その二（後書き）

松田憲秀

堅物、その一言に尽きる男。

文武両道に秀でており部下からも信頼されている北条一の家臣と言える。

氏時の教育係も兼ねている為、その才を埋もれさせないためにも厳しく接している。つまりは愛情の裏返しというやつである

大道寺政繁

城より城下に居ることの方が多い。

彼曰く「領民視点で政策を考えるため」らしい。

イケメンのため領民（主に女性）にかなり人気、誰にでも気さくに話しかけるため友人は男女問わず沢山居る。基本目上の人物に対しては敬語を使うが氏時には許されたため軽い口調で話す。

遠山綱景

仕事の合間を縫っては茶をたてたり連歌を作っている落ち着いた雰囲気の人。

自分の世界に入るといきなり話題が変わったり意味深（？）な発言をする。

同じような趣味を持つ今川と仲が良く同盟も彼がいたからこそ……らしい。

この世界はもしかして…

時は流れ季節は巡り……俺は十五歳の立派な若者へと成長した。

そして今更ながら俺は気付いた事がある……

ここってゲームの戦国BASARAの世界だ……って。

そう思い始めたのは俺が十二の時。

俺はいつも通り城の道場で百人抜きをやっていた……え？数がおかしい？最早俺にとっては普通の事だ。

とにかくそれが終わった直後突然お爺様が道場に来て「これからお前に北条家の奥義を教える！」とか言われ強引に外へ連れ出された。

少し待っておれと言われしばらく待っていると武装した状態でお爺様が現れた。

その姿を見て俺はあれ？と思った。確か俺が持っていたゲームの中に同じような姿をしたようなキャラが居たような……と思っていると

「北条究極奥義！でやああああい！」

と持っていた先端が六つに分かれた槍を振り回すと地面に突き刺した。

その瞬間、そこから冷気が吹き出したかと思うと目の前に巨大な氷塊が現れた。

俺は驚いてお爺様の方を見てみると……技を使って疲れたのか今にも死にそうな顔をしていた。

その後、お爺様を抱えて急いで縁側に移動したのは言うまでもない。

数分後、お爺様に槍を渡され『お前もやってみい！子供の頃から人一倍優れておったお前ぢゃ！お前ならできるぢやろう！』と言われ

た。

そんなの無理だろうと思いつながらもお爺様の指示通りにやってみると…

「ビキビキビキン！」……………ワオ」

見事に出来てしまった。その後狂喜しているお爺様からこの力が婆娑羅と言う力であるという事が分かった。

うん、バサラって聞いた瞬間確信に変わったよ……………ここBASAR Aの世界なんだ……………って。

その後の俺はがむしやりに猛特訓した。何故かって？分かる人には分かる筈だ。

北条はあのゲームでは“やられ役”の立場。俺の記憶が正しければ豊臣によって……………それだけは避けたい。

しかし悪いことばかりではない。なんと風魔が俺に仕えてくれたのだ。本当なら金さえやれば何処にでも付く傭兵だった筈のあの風魔が！

……………これはイレギュラーの特権と言う奴だろう。この時は本気で師匠の弟子になった事に感謝した。

……………そして今現在に至る。

「風魔、他国の動きは？」

「……………」

風魔は懷から一枚の手紙を取り出し俺に渡した。

風魔には今日ノ本の各勢力の情報を集めて貰っている。

……うん、まだ武田には真田幸村と言う武將は居ないし伊達や織田、その他の勢力も動きを見せていない。

まだ大丈夫……かな。

「ご苦労風魔、帰って休んでいいぞ」

「……「ヒュッ」」

因みに風魔は既に師匠の腕を超えたらしく小太郎の名を受け継いだ、師匠曰く『免許皆伝、既に私に勝るとも劣らない腕だから』らしい。まだ見た目十三丁四なのに師匠を超えるとは……流石は伝説の忍と呼ばれる者、と言った所だろう。

「おお氏時、ここに居たか」

「あ、お爺様……」

風魔と入れ替わるようにお爺様が俺の所に来た。しかしお爺様は元氣だ、北条家秘蔵のお灸を使っているかららしいが俺が生まれてから全く老けた様子が見られない……まあ俺が生まれた時から爺さんだった訳なんだが。

「何のご用ですか？」

「いや、お主に渡したい物があつてな……付いて来い」

俺はお爺様に言われるがまま後を付いて行くと「北条家宝物庫」と書いてある重厚な作りの倉の前まで来た。

お爺様は無言で扉の錠を外すと中に入って行った、俺も後について宝物庫の中に入って行く。

中は長年誰も入っていなかったのかカビ臭く埃をかぶった箱が所狭しと積まれていた。その奥でお爺様は何かを探しているようだっ

「これでもない…これは？…ちがうのう……一体何処に仕舞ったんぢやったか……おっ！あつたぞ！」

目的の物を見つけたようで「家宝」と書いてある長方形の箱と何かの巻物を取り出した。

そして倉の入り口に立っている俺に渡すとお爺様は倉を出た。

「お爺様、これは？」

「後で説明するわい。ささ、次は武器庫ぢゃ」

武器庫に着くとお爺様はそのまま奥の「北条の者以外立ち入り禁止」と書いてある扉を開けて中に入っていた。

中に入ると代々北条家の者が使っていた刀や槍が納められていた。

ふと俺はその一角にある「触れるべからず」と書いてある巨大な箱が目に入った。

……聞いた事がある。あの中に入っているのは昔お爺様が究極の破壊力を求めて作った鹿刀槍豪球と言う槍とは到底思えない形の武器が納められているらしい。

その破壊力は驚くべき物だったのだが作成したのがお爺様が五十代過ぎの頃で自分の体の事を考えず調子に乗って振り回した結果……腰を痛めたらしい。

それ以来お爺様はその槍を封印し、ここに置いていたと言う訳だ。

「これぢゃこれぢゃ…よし、用は済んだ。ワシの部屋へ行くぞ！」

いつの間にかお爺様は北条家に代々伝わる六叉槍？鹿刀槍綱廣を持

っていた。

「ぼやぼやせんと早く持たんか……行くぞ！」

「えっ…「ガシャリ」…うおっと！」

俺に槍を持たせるとさっさと武器庫を出て行ってしまった。

「ちょっと待って下さいお爺様…歩きづらい！」

俺は持っている物を落とさないように必死に頑張りながらお爺様の後を付いて行った。

あのお爺様の張り切りよう……俺は何かあると思いながら武器庫の後にした。

風来の氏時誕生！？

「あ、師匠」

「久しぶりだな……私はもうお前の師匠ではないぞ」

「いいじゃないですか弟子だったんですから、それに風魔って呼ぶとややこしいですし」

「それもそうだな」

お爺様の部屋に着くと意外な事に師匠が居た。

風魔が小太郎の名を継いだ時に隠居したらしくしばらく見ていなかったが姿は全く変わっていないかった。まあ容姿は俺が初めて会った頃から少しも変わっていないのだが。

今でも師匠は何歳なんだろうと思う。まあ師匠の年齢を知る事は見ず知らずの女性の年齢を知る事の百倍は難しいと思うので調べようとも思わないが。

「それで……何で師匠がこんな所に？今は隠居していると風魔に聞いたんですが？」

「うむ、それが北条殿がお前の戦闘方法に合うような鎧は無いかと言われてな。お前の戦闘方法をこっそりと見せて貰い作ったのだ」

「……わざわざこっそり見る理由があつたんですか？」

「いや、観察となるとつい癖だな……」

癖って……いや忍者だから分からなくもないけどわざわざそんな事しなくても……

しかもキリツとした真顔で返答しないで欲しいです。かなり突っ込みづらいです師匠。

しかしそれらしい気配全くしなかった……やはり忍者の修行をしたといっても超一流には敵わないな。

「全く…機動性にものを言わせた風魔の技とこの家独特の重々しい槍術という相反した組み合わせの独自の技、それに北条殿からの注文……全く作らせるのに苦勞をしたぞ」

そう言つてドン！と俺の目の前に大きな箱を置く……一体どこから取り出したんですか師匠……本当に師匠は謎すぎる。

まあそれはともかくこの中に俺の防具が入っているのか……どんな感じの物なのだろう。

「風魔の技を有効に使う為に軽く、しかし防御力は非常に高い究極の装具がこれだ！」

そう言つて師匠は箱を開けた。俺とお爺様は箱の中を覗き込んだ。箱の中にあつたのは……

三度笠や合羽といったものと見るからに薄い胴当てや小手、具足だった……

マテ、何だこの風来のシ○ンなりきりセットみたいなのは。もう何か突っ込み所が満載すぎて何にも言えないんだが……

「ふふふふ風魔あ！これはなんぢゃあ！」

「何とは…防具ですが？」

「200万両請求されて…これのどこが防具ぢゃ！どこからどう見ても風来人や旅商人が着ている服ぢゃろうがあ！金を返せい！」

顔を真っ赤にして怒るお爺様、それに対し師匠はと言うと「何か問題でも？」と言つた顔をしている。

そりや200万両使って旅衣装出されたら怒るだろ。師匠は一体何を考えてるんだ？

「お待ち下さい北条殿、これはただの旅衣装ではありません、氏時…取りあえず着てみる」

「え……はい」

俺は中の衣装を取り出して着てみる。

凄い、俺の体に合わせて服も装具も作られている……

服と装具はお爺様の鎧と同じく紫と青のツートンカラーで中々センスがいい。

そして合羽には真ん中に堂々と金の刺繍で北条家の家紋が…恥ずかしい。

最後に三度笠を被って…着替え完了。

「どうですか？似合っているでしょう？」

「うむ、似合っているのう……って違うわい！ワシが言いたいのは

…」

「防御面も完璧です」

そう言って師匠は至近距離で特大風魔手裏剣を取り出すと俺の目の前で…

「せいっ！」

「え！？ししょ「ドガガガッ！」おばばばっ！？」

「氏時いっ！風魔何をつ！？」

投げつけてきた。

いきなりそんな事をされて避けられる筈も無く直撃し吹っ飛ぶ俺。

ああ、俺死んだ……ってあれ？あんまり痛くない？

何があだか分からないまま俺は立ち上がり風魔手裏剣が当たった胴当てを見る。そこには少しばかりの傷が出来ていた。

「え？何で……」

「言っただろう？防御は完璧だと……どうですか…北条殿？」

「お、脅かすな風魔……危うくご先祖様のもとへと旅立つ所ぢやったぞ……」

胸を押さえているお爺様。そりゃこの年でいきなり孫が風魔手裏剣で着られるところを見たらなあ……

「実演してみせるのが一番だと思いましてね…防具には希少な金属であるヒイロカネを、衣服には蜘蛛の糸を使い作った最高級の装具です」

「なんぢや？ヒイロ？蜘蛛？」

「要は金属も衣服も最高級の強度を持った物で作った訳です」

「ふむ、よく分かんがあの強度ならまあいいぢやろう」

「あの……俺の意見は？」

「そうだ、お前が被っている三度笠は風魔手裏剣になるぞ。暇な時に練習しておけ」

俺の意見は無視ですかお二方……しかもなんですかそのビックリ変形機能は。

「ほれ、後渡す物があるんぢやからこつちへ来んか！」

「俺の自由は何処へ……」

その後、俺が持ってきた物を全て貰った。家宝や先祖伝来の武器をそう簡単に渡していいのかと聞いたら『どうせお前とワシしか使えんからいいぢやろ』と言われた。

そうやら婆沙羅を使える者が持つて真価を発揮する物らしい。
因みに家宝は肩に装着する盾のような物で名前を“鉄盾”と言い、
北条家の紋章に角が着いた装飾がこれでもかと付いたケバいデザイン
だった。

巻物の方は“北条家最高灸”と言う先祖伝来のお灸の作り方が書いてある巻物だった。

……正直欠片も要らなかったが『北条の者なら必ず覚える！』と言われ強制的に渡された。

その後、俺の装備一式を含めた持ち物全てを運ぶ事になった。

今度は風魔が来て手伝ってくれたからよかったものをつこんな量を運べとか言われたら俺確実に放棄してたな……

「ありがとな風魔」

「……「ヒュッ」」

風魔は軽く会釈すると俺の前から再び姿を消した。いやはやこんな優秀なボディーガードが居て本当に良かった……

俺はそう思いながら部屋の隅に積み上げられている箱の山を見る。
防具はともかくこのお灸やら槍やらをお爺様の部屋に持つて行く意味あつたのだろうか……

まあ考えても仕方が無いだろうと思い俺は早々に寝る事にしたのであつた。

風来の氏時誕生！？（後書き）

北条家最高灸

北条家当主の長生きの秘訣。

お灸を頭のあるポイントに置くことにより身体能力の大幅な強化をすることが出来る。

戦闘中に火をつける暇が無い時の為気合いで発火出来るという謎な特徴がある。

一応投げつけて相手に攻撃することが出来るが攻撃力に期待しちゃいけない。

……何でお灸の説明してるんだろう。

旅立て風来人…… ってハイ？

「氏時、旅に出る」

「……は？」

ある日、俺はお爺様が俺を呼んでいるという事なので行ってみると突然そんな事を言われた。

旅に出るって何ですかお爺様。あの防具ですか？あの防具が理由で俺に旅に出るって言うんですか？

「そんな顔をするでないわ氏時、旅と言ってもお使用のようなものぢゃ」

そう言うとお爺様は高級そうな小箱を持ち出した…あれだ、よく巻物とか文が入ってそうなやつだ。

しかも結構高級そうな見た目だな、どこかの国にでも渡す為の物なのだろうか…… そんな大事な物まだ若い俺なんか任せていいのか？

「この同盟を求める書が入っている箱を安芸の毛利に渡して来て欲しいのぢゃ」

「はあ…毛利にですか…… って毛利！？」

俺は思わず聞き返してしまった。毛利って…確かBASARAでは「兵など所詮捨て駒よ」とか言いながら日輪で光合成するオクラだったような……

やばい、もう転生してから十数年経つから情報をあんま覚えて無い……

まあ風魔が日ノ本各地で諜報活動をしているからこの頃君主が変わったとかであつという間に他国を制圧、同盟を結んで急速に巨大化

した勢力だつてのは聞いたんだけど……
安芸つてこつからかなり離れてた土地のような…… 同盟を結ぶべく
も無いと思うんだけどなあ……

「あの…… お爺様？ そう言う事は忍にでも任せれば良いのでは？」

「いやそれが…… この事を提案したのは他でもない風魔での」

「へ？ 師匠が？」

「うむ、かわいい子には旅をさせよとよく言うではないかと言われ
ての、ワシは反対したんぢやが強引に押し切られてしまつてのう」

顎をさすりながらそう言うお爺様…… あの、なんで俺から視線を逸
らしますか？

嘘だ、絶対嘘だ。 多分その他にも金がかからないとか金がかからな
いとか金がかからないとか言われたに違い無い。

多分師匠の事だ、口八丁手八丁を使い同盟を結ぶ方向へとお爺様を
誘導したのだろう、お爺様は心配性だからなあ……

「ま、そう言う訳ぢやからすぐに出發してくれい」

「一応聞きますが…… 拒否権は？」

「無いぞ」

「風魔使つていいですか？」

「風魔をあくまでお供として使うなら許すと言つてたぞい」

師匠…… そんなに俺に旅をさせたんですか？ 本当に師匠は俺に何を
期待しているんだか……

まあ師匠がダメと言うんだから風魔をヒューツと行かせてお使い成
功…… は使えないな…… お供で我慢するか、結構心強いし。

「わかりました…… それでは今日中にでも荷物を纏めて行つてきま

す」

「うむ、頑張ってくるんぢやぞ！」

こうして、俺の（強制的）日ノ本横断の旅が始まったのであった。

「さて風魔……旅立って三日になるけど……つまんないな」

「……………」

「旅なんてそんなもん……って言われてもな、ハア……他国を自由に飛び回っているお前はいいよな、馴れてるし」

旅はとてつもなく暇だった。金は余りある程貰っているので食うには困らないが……

「ザザン……」

海沿いを歩いているので景色は変わらないし歩いてくる人はまばら所か全く居ない……

故にとてつもなくつまらない、風魔は自分から話しかけてくるような奴じゃあ無いしかといって俺が話しかけても大体簡単な受け答えで会話を切ってしまう……うん、つまらん。

「……………」

「こんなノロノロと歩く事は無いから以外と暇？…だよな、忍ってスピード命だし」

「……………」

察してくれたのか風魔が話題を切り出すも……次が続かなかった。

『はい』って言われてもこっちが困るよ風魔……

まあそんな感じで切れ切れだが取り留めのない話をしながらゆつくりとしたペースで進んで行く俺と風魔。

因みに言っておくが風魔は俺と同じ旅衣装だ。まあ黒を基調とした服だが三度笠は被らずバンダナを付けているが……本当にどうやって前を見てるんだろう？

忍びの技というやつなのか……いや、出会った時からしてたから違うか、固有スキルだな、うん。

……そんなバカな事を考えるくらい暇なのだ、どれくらい暇かこれで少しはわかって頂けたかと思う。

俺は静かな波音をたてている海岸を見た、小枝や貝などがまばらに打ち上げているが……やはりいまいち面白みに欠ける。

「何か面白いものでも海岸に落ちてないかな風魔、ヤシの実とか」

「……………」

「小舟？小舟なら漁村でよく見るじゃないか何を言ってる……」

「……………」

「え？違う？前がどうした？……………って船！？」

風魔が前を良く見るとうるさいので目を凝らして見てみるとかなり痛んだ小舟が横倒しになって浜辺に漂着していた。

難破船だろうか？普通の漁村にある船とは形が違うな……南蛮船や交易船か？いや、それにしても小さすぎる……

船の周りには荷物と思われる物が散乱しその中に人の姿も見えない人！？大変だ！

「！ 風魔行くぞ」

「……………」

俺と風魔は大急ぎで船の方へと走って行った。

旅立て風来人……ってハイ？（後書き）

遂に次回新キャラが……期待しないで下さい。
見事に期待が打ち砕かれると思うので。

教祖降臨、そして……洗礼？

俺と風魔は小舟に駆け寄りうつ伏せで倒れている大柄の男性を助け
近くの漁村の宿まで運んだ。

この男は……と思いながらもかなりの衰弱状態だった男性を見捨て
る事は出来ず必死に介抱した……そして翌日元氣よく目覚めたその
男性というのが……

「オー！アナタイッパイいい人デスネ！ザビー助かりマシタ！」

そう言つて抱きしめてくる南蛮風の大男……ザビー教の教祖である
ザビーでした。

いや、船の中見た時正直一瞬そのまま放置しようかと思ったよ。
でもさ、人間としてなんか嫌だからなんて理由で放置なんか出来な
いじゃん。

……………ザビーでも。

「アナタは慈愛の心ガー杯デース！ザビーカンゲキしちやいマシタ
！お名前オシエてクーダサーイ！」

「……ほ、北条……氏時」

「オー、いいお名前ネ！ソレじゃあ……」

ザビーは懷から紙と筆を出すとサラサラと何かを書き始めた。

……何だ？勧誘の紙でも書くつもりだろうか？それだったら目の前
で破り捨ててやる。

「ン、後はこれをポンッ！これで完成デース！」

書き終わったらしく筆を仕舞いハンコらしい物を紙に押すザビー。
そして俺にその紙を差し出してきた。
それを受け取って分を読んでみると……

「ん？何……洗礼名メシア北条ってなんじゃこりやああ！？」

達筆とは言えないがそこそ上手い文字で『貴方の洗礼名はメシア北条』です……と書かれていた。

うん、勧誘そして入会という過程を見事にすっ飛ばして洗礼名くれちゃいましたよこの人。

そして右下に押してあるザビーのマークが何かイラツとする！

「アナタ私のキューセーシュ、だカラメシアダヨ！メシアにシユクフクアーレイ！」

その瞬間宿の天井からまばゆいばかりの光と共にザビ顔の天使が舞い降り……

つてうわああああ！袖をつかむな！につこり微笑むな！俺の周囲をくるくる回るなあ！

「いやいやちよつと待て俺はザビー教なんかに……」

蠅を追い払う要領でザビ天使を天に送り返してザビーに向き直る、しかしザビーは何を勘違いしたのか俺に満面の笑みで見つめると肩を掴んで……

「アナタはワタシのメシアだから入会金モ一切要りませーン！チヨベリラツキーヨ！」

「いやだから俺は……」

「サア！ザビー教の聖歌ヲ歌いマシヨー！リサイタルデーース！」

肩から手を離し高らかにそう宣言すると宿の外へと飛び出して行った、駄目だこの教祖様……人の話を聞く気が微塵も感じられない。それに聖歌歌うのにリサイタルっておかしいだろ……

「何ヤツテルノメシア？アナタも手伝いナサーイ！」

「は？」

「ハヤーク！ザビーの船の荷物モチダシ行きますよ！アノナカに簡易リサイタルセット入ってマース！」

「ちよっ！俺は「グイッ」うおおっ！？」

色々つぶつ飛び過ぎているザビーについていけず啞然としている俺達だったが戻ってきた彼に腕を引つ張られ強制的に連れ出される……何？強制なのか？

有無を言わさずズルズルと引きずられていく俺……こいつ助けない方が良かったかもしれない。

「急ぐデーース！今夜この村でリサイタルシマース！メシアのお供のバンダナボーイもテツダッテ！」

「……………！？」

「才膳立ては急げデーース！ゴー、ザビー！！！」

「それを言うなら善は急げ「グイッ」どおうあああ！」

その後俺と風魔はザビーに付き合わされて船の荷物を全て運び出して漁村で「ザビーの聖歌リサイタル（洗脳）」を行い村人全員に愛を伝え たった一夜でのどかな漁村をザビー教信者の村へと変貌させた。

あれは見ていて恐怖だった。ザビーはザビザビ〜としか歌っていないのに村人が次々と

「私は……愛に目覚めた!」

「ザビー様あ!最高です!」

「お布施……お布施を取りに行かなければ」

「ザビザビザビザビ……」

「おじいさん!?!しっかりしておくザビザビザビザビ……」

……最後のは少しおかしかったが全員そんな感じで次々と信者と化していった。

バイオハザードもビックリの広がり方だ……既に信者の俺には効かないのかあの人達みたいにはならなかったが問題は風魔……は何故か普通に無事だった。ほんと色々と凄いや風魔は。

「フー、いい汗カイトネ!メシア…そしてバンダナボーイ…とつても助かったヨ」

「そりやどうも」

「……………」

リサイタル後、汗をタオルで拭きながらザビーが歩いて来た。

俺と風魔はというとあんな強烈な聖歌……いや既に一種の音波攻撃と化していた騒音を長時間聞き続けたことでかなりげんなりしていた。

幾ら効果は無いと言っても音波攻撃事態のダメージを抑える事は出来ない。まあ洗脳されるよりは遥かにいいんだが。

「メシア!アナタ私がコッチの方に来てから初めてノ信者ダッタからザビー張り切りスギチャッタヨ!」

そついやザビーって確か九州の方に拠点置いてるんだつたな。
そう考えると小田原近くまでこんな小舟で……相当気合い入れて来たんだな。

「ザビーホントはもつと西に居たんデスケドコツチにはあんまザビーの愛が広まって無いって言うから来たんデース」

「ふうん」

「デモザビー考えました……船旅疲れました……オウチ帰りマース」
「！」

……おい。

「でももう海はゴメンよ！嵐とっても怖い！今度はチャント地に足着ケテ帰りマース！」

「あつそ」

俺にとってはどうでもいい話なので軽くスルーする。

……しかし俺は考え違いをしていた。考えても見てくれ。何でザビーがこんな苦労話を俺にしたのかを。

ザビーはにっこりと笑って俺の両肩に手を置いた。

「そしてメシア。アナタにザビーがオウチに帰るまでボディーガードを頼みマース！」

「……………はい？」

「明日出発シマース！もう夜遅いから早く寝て早く起きマシヨー！」

そう言い残すとザビーはさつさと宿に戻って行ってしまった。

……厄介な事に巻き込まれたなホント……まあ進む道は同じだからいいか……な？

教祖降臨、そして……洗礼？（後書き）

ザビー

世界に愛を伝えるザビー教の開祖。

両手に装備したバズーカで愛を知らない者に天罰を与える。

目的の為に手段を選ばないが手段の為に目的を忘れる事が良くある。

メシア北条

主人公がザビーを助けた後洗礼によって愛を救う救世主になったぞ！
実力はまだまだ未知数だ！頑張れメシア。負けるなメシア。ザビー
教の明日の為！

バンダナボーイ

メシアのお友達。洗礼名じゃないよ。

疫病神ザビーといっしょ（前書き）

戦国BASARA3買って小田原城攻めて氏政撃破……何だろうちの複雑な気持ちは。

そしてまだ風魔を使っていない俺が居る……

疫病神ザビーといっしょ

ザビーと出会って早二週間。俺達は甲斐、三河を越え尾張へと入っていた。

え…武田？今川？……そんな出会いイベントザビーが居る状態で起こったら大体何布教してんだとかの理由で出会って戦闘でしょ？同盟結んでる今川はともかく甲斐の熱血師弟は命いくつあっても足りないでしょうが！

俺はね、必死にその非常事態が起こらないようにザビーのリサイタルをこの十四日間中止させ続けてきたんだから！

「メシア！早くキナサーイ！」

「それなら荷車引くの手伝ってくれよ……」

因みにザビーのリサイタルの次の日、信者となった皆様から荷車が贈られその中に船の荷物を積み込んで運んでいる。

ザビーが先頭で、少し後ろに俺と風魔が荷車を引いている。

ザビーは「荷車引くノハメシアの仕事デース！」と言って欠片も手伝ってくれなかった。お前の荷物だろお前の！

荷車引いてたつた十四日で二つの国を越えたのだ。少しは褒めて欲しいよ全く……

あ、そういえば今父上は三河に仕えている。そんな事もあってか三河の竹千代様……後の徳川家康とも面識がある為結構好きな土地だ。挨拶でもしていこうかと思ったがザビーを連れているので断念する事にした。

「……」

ちらりと後ろを見てみると普段は無表情な風魔でさえ露骨に不満そうな顔をしていた。

……そういや風魔の不満そうな顔初めて見たぞ俺。相当嫌なんだな風魔……忍びは感情を表に出すな！と師匠に厳しくしつけられてた上彼自身表情を表に出さない性格だから本当に嫌なんだという事が分かる。

「ハヤーク！コノ尾張ってトコ何だか気分ワルイヨ！早く通り過ぎるガ吉！」

「…………その考えには賛同する」

織田信長の居城である安土城がある城下町はとんでもなく力オスな状態だった。

魔王と名高い織田が治めてるんだから一面がまるで暗黒世界のような感じだと思っていたのだが城下町は青空広がる普通の町だった。入った時は拍子抜けしたね、ホントに。

城下町自体も活気があり人々も生き生きと日々の生活を送っていた……しかし城の近くを見てみれば黒雲が渦を巻き木々は枯れ乾いてひび割れた地面が剥き出しになっている中にそびえ立つ魔王の居城こと安土城……どんな力オスだオイ。

取りあえずこんな訳の分からない所からはさっさとおさらばするのが最善だと考えるのは当然の事だろう。

尾張では宿を取らずそのまま突っ切ってしまうおう……と言う結果になったのである。

「…………でもいくら何でも何も買わずに城下を出る事は無かった気がするぞ？」

「何イッチャッテンノ！？メシアあのお城見たデシヨ！？ザビーとつても怖かつタヨー！？」

そう言つてガタガタ震えながら自分を抱きしめるザビー、……違う意味で破壊力が抜群だな。

まあ怖かった、というのは素直に賛同する、将来あんな城に住んでる連中が小田原に攻め込んで来たら……うつつ、背中に寒気が……

「トニカーク！今日はヨナベしてデモ尾張からデマース！」

「夜なべって……まあいいかザビーだし」

毎度のザビーの日本語間違えに突っ込むのにも飽きてきたので俺は無言で荷車を引いてザビーの後に付いて行つた。

そしてその夜……

「ン！？」

「？ どうしたザビー？」

「オオオオオオオオオ！」「ドドドドドドド……」

「………何だ？」

「………？」

突然ザビーが雄叫びを上げながら大きく道を外れ森の中へと消えていった。

………一日中歩いてたせいで頭が狂つたか？

「メシア！早くキテ、大変ヨー！」

「ふう………一体何だザビー？」

しばらくすると俺達を呼ぶ声がザビーがが走つていった方向から聞こえた。

かなり焦つたような声だ。俺と風魔は顔を見合わせると急いで声の

した方へと向かった。

「どうしたんだザビー？」

「……ムコウ見てミテ」

茂みに隠れるようにしゃがんで何かを見ていたザビーを発見して声をかけると茂みの先を指さした。

俺は茂みをかき分け先を見ている……すると

「ギャー！」

「ウハハハ！刃向かう奴には容赦するな！」

「た、助けてくれえ！」

「……何だ！？合戦か？」

茂みの先では鎧を付けた兵士達が戦っていた。

双方共家紋と思われる旗を背負っている事からどこかの軍なのだろう。

「アレ片方は何か運ぼうとしてたミタイヨ？それでもうカタッポがそれ奪おうとしてるミタイ」

「そうなのか？」

「デモこのままじゃ負けちゃうヨ。それでメシア呼びマシタ」

「……………え？」

……あー、何だか嫌な予感がする。

「ナニ力を運んでる方助けてマース！そしてミナサンにザビー教に

入ってモラッテお布施ガツポガツポ貰っちゃいマシヨー！」

……理由が不純過ぎだあ！流石ザビー。勧誘の為なら手段を全く選ばない！

「サアメシア！キューセーシユの名のもとにセーバイしまシヨー！」

「おい待てザビー、何の策も無しに出ていくなんて馬鹿すぎ」「ゲイツ」嫌あああああっ！」

こうして俺は望まぬ戦闘に引きずり出されたのであった……

この時代の車って……車じゃ無いよね。

「ハッシャー！」「ズドオン！」

ザビーは飛び出すと片手に装備していたバズーカをぶっ放した。
派手な爆音と共に数人の兵士が宙を舞い兵士達の視線が一気にこちらに向いた。

「な、何だ！？」

「変な奴らが現れたぞ！」

「て……敵か？」

どちらも敵か味方が分からない奴が現れたので困惑しているようだ。

「サアメシア！あの馬車守ってる方助けるカラあの金色っッポイ鎧
付けてる方倒すヨ！」

「はあ……了解」

……うん、ここに無理矢理出された時点だね、戦闘確実だよ……腹
括ろっ。

「天に召されナサーイ！」

「ズドン！ズドン！」

「うわあああ！デカいのが攻撃してきたああ！」

「ひえええええ！」

ザビーは両手にバズーカを構えて敵に乱射し始めた。

突然現れバズーカを乱射してきた大柄の男に敵側はあつと言う間に混乱に陥った。

「おい貴様、一体何者だ！」

馬車を守っている一団から数人の兵が俺の方に走って来て俺に槍を向けた。

まあ俺の方がバズーカ乱射してる変人よりかは話聞きやすそうだし仕方ないか……

「答える、貴様等は一体何者だ」

「あ……あそのバズーカぶっ放してる変人の連れです。近くに居たんで加勢しに来ました」

「それでは敵では無いのだな……」

「ああ、敵じゃない……だから武器下ろして」

「……武器を下ろせ」

その中のリーダーと思われる男が指示を出すと俺に武器を向けていた兵は武器を下ろした。

「今現在賊に攻撃している貴様の連れが居ることだ……一応は信じてる」

「ありがとうございます」

「……まあ助力には感謝する、と言っておこう、行くぞ！」

そう言うと兵士達は前線に向かって走って行った。

「愛をシラヌアナタ達には天罰デース！」

「「ドオン！」うぎやあああ！」

「全く近づけねえ……バケモンだ！」

「そんな奴放つておけ！俺たちの目的はあいつ等が守ってる豪華な車だ！」

隊長格と思われる男が指示を出しザビーを避けるようにして敵兵が車に襲いかかる。

「そうはさせるかよ！」

俺は敵兵の目の前に飛び出し六叉槍で目の前に来た数人を一気に吹き飛ばした。

「うわっ！また変なのが……」

「へ、変な姿って言うな〜！」

「ズバアッ！」ごふうっ！」

うろたえていた兵士達を俺は次々とぶちのめしていった。

……うん、イラッときたんだイラッ。登場じゃなくて姿に驚くとか何？そんなにおかしいか？時代的には合ってる服装じゃねえか！

「おらおら食らえ！北条家氷結奥義い！」

「「ビシッ！」あぎゃああ！」

「こ、こいつもバケモノだったああああ！」

「失礼なっ！俺は人間だああああ！」

「「ビシバキーン！」ごふああっ！」

俺は力の限りなぎ倒し凍らせぶっ飛ばした。

しかし数の暴力とは酷いもので敵は次から次へと沸いて現れ車を護衛していた兵達は一人、また一人と倒れていった。

「ははは！もう兵は殆ど居ないぞ！ダメ押しだ、お前等車を破壊しろお！」

「ウオオオオオ！」

「な、何だ！？」

隊長格が号令をかけると普通の兵に混じって有に俺の身の丈の二倍はある巨大な柱を持った大男が何人も現れた。

……あんな物振り下ろされたら車がひとたまりもないぞ！

「ザビー！あの大男ぶっ飛ばして！」「オーケーイ！ザビーの大砲が火を噴く」「プスン……」……オー、ターマギーレース」

「嘘お！？」

こんな大事な時に玉切れかよ！

「ん？あの大男砲撃をしてこないぞ？これは好機！一気に畳みかけてしまええ！」

「ウオオオオオオオ！」

ピーンチ！ヤバいやババ！四方八方から大男があ！

今車の近くに居るの俺と数人の兵士だけだよ？守り切れねえ！

「ザビー砲弾取りに行つてクルヨ！ガンバつてねメシア！」

「ちょ！待てザビー……！」

ザビーは颯爽と来た道を引き返し林の中へと消えていった。

……これは絶対絶命と言う奴だね？確実にそうだね？

「ウオオオオオ！」

「クソオオオツ！」

襲いかかつて来る大群に諦めかけたその時、

「ヒュヒュヒュッ……」

「「バシュ」……がつ!？」

「「ザシュ」おがあっ!」

「「ドシュ」ぐえっ?」

「「ズバァッ」あぐえっ!」

「……………え?」

風を切るような音がしたかと思うと襲いかかっていた大男達が首から血を吹き出して倒れた。
息なりの出来事に敵味方問わず啞然とする。しかし俺は誰がやったのかすぐに分かった。

「……………出るのが遅すぎだぞ、風魔」

「……………」

後ろを振り向いてみると車の上に無言で風魔が腕組みして立っていた。

BASARAのカラクリってよく分かんない

「風魔、お前はそこで車を守ってくれ、俺はあそこにいる大将をぶっ倒す！」

「……………」

俺は風魔に指示を出すと先程指示を出していた大将と思われる男の所に突っ込んで行った。

「オラオラ死にたくない奴は退きなあ！」

「ひえええ！突っ込んで来たあ！？」

「あいつには敵わねえ！に、逃げろお！」

先程の暴れっぷりを理解しているのか敵わないと悲鳴を上げながら俺に道を譲る敵兵達。

あっと言う間に敵の大将までの一本道が出来上がった。

「お、おい貴様等！？逃げるな！立ち向かわないか！」

一直線に自分に向かって来ている俺を見て慌てふためく大将。

「く、くそおっ！ここは戦略的撤退だ！」

そしてやられ役のような台詞を吐いた後俺に背を向け一目散に逃げ出した。

……しかしながら俺は忍者の修行を受けた身。スピードは風魔に負けるがそれでも十分すぎるほど速い。あっと言う間に追いつき大きく六叉槍を振りかぶる。

「それじゃあな！」

「へ！？」「バキィッ！」けぶう！」

俺の声に振り向いた時の間、抜けな顔に六叉槍がヒットし「ゴキッ」という鈍い音と共に吹っ飛んだ。

たぶん首の骨折れたなアレ。

さて、大将も倒したしこいつ等も諦め……

「行け、爆弾兵」

「！？」

先程の大将とは違う声がしたかと思うとそれと同時にどこに隠れていたのか巨大な爆弾を背負った兵士が2、30人現れた。

「やれ、車の周りの兵だけを吹き飛ばせ」

「ウアアアアアアア！」

俺が声のした方向を見ると顔を白い面で隠した三人組の鎧武者が立っていた。

あの三人…もしかして………

「アアアアアアア！」

つて今はそんな事考えてる暇は無い！今すぐあの爆弾兵止めなきゃ車の周りにいる兵がみんな吹っ飛ぶ！

「うおおお退けええええ！」

俺は大急ぎで周りの敵兵をなぎ倒しつつ大急ぎで爆弾兵の元まで走った。

「させるかあああ！」

爆弾兵の一団に追いつき一番手前に居た爆弾兵の横っ腹に一撃を入れて吹っ飛ばす。

「ドゴッ！」エグアアア！？」

一撃を入れられた爆弾兵は空中をきりもみ回転しながら仲間の爆弾兵の中に落ちていった。

「アアアア……アア！？」ズドドドドドゴオオオオオオン！
」

地面に落ちた衝撃かは分からないが吹っ飛ばされた爆弾兵が爆発しそして周りにいた爆弾兵も一気に誘爆した。

「アアアアアア！」

「！しまった」

爆発に巻き込まれずにいた爆弾兵が数人居たようで車の方へと走って行ってしまった。

俺はすぐさまその爆弾兵を追うがポイントに着いてしまったようであまり立ち止まると背中に背負っている爆弾を持ち上げた。

「クソッ、間に合ええ！」

「アアアアア！」「ブンッ！ザシュッ！」「グア！……」

しかし俺が後ろから切りつけるのと爆弾兵が爆弾を投げるタイミングが重なってしまった。

俺が切りつけるのと同時に爆弾が宙を舞い車を守っている兵士達の方へと飛んで行った。

「風魔、爆弾を！」

「……………」

俺の声に反応し風魔がすぐさま風魔手裏剣を取り出して爆弾の方へと投げた。

「ズドドドン！」

「よし！良くやったぞ風魔！」

「……………」

風魔の投げた手裏剣は見事当たり爆弾は全て碎け散った。

「チッ」

「所詮は雇われ」

「アレを出すか」

「そうだな……」

本当の大將だと思われる三人組は何かを呟くと奥へと消えて行った。

……あの三人何て行ったかな、確か何とか三人衆とか言ったような……

「ガラガラガラガラ……………」

「へ？何だ！？」

突然複数の車輪の音が聞こえてきた。

……待て、この音は嫌な予感しかない。BASARAで車輪音と言ったらアレしかない。

暫くするとその音の正体が数台現れた。………うん、予想どおりだ。まるで台座に上半身だけ乗つけた木彫りの仁王像みたいなヤツ…間違いない。

「仁王車だああ！」

「ガラガラガラガラ」

しかも四体。四体も居ますよ奥さん。お得ってレベルじゃないよ？どうやって壊せって言うんだよ！？ゲームみたいに適当にぶっ叩く？常識的の考えてくれ…出来るかぁ！

「これなら槍や飛び道具では破壊出来まい」

「まさかこれを出す事になるとは」

「ここまで来たら意地だ、どうやってもあの車の中身を貰う」

その後ろには何とか三人衆が立っていた。

絶対勝ち誇った笑みをしてやがるあいつら。絶対、絶対だ。誓って言える。

「行け仁王車、叩き潰せ！」

三人衆が指示を出すとどういう仕組みか全く分からないが張り手のようなポーズを取ってから俺の方に向かって来た。

………どうする、どうすんのよ俺え！

BASARAのカラクリってよく分かんない（後書き）

爆弾兵

雄叫びを上げながら突っ込んできた後キャラの近くに爆弾を残し自分は居なくなるとんでもない敵キャラ。

アニメ版では爆弾残して消えるのは不可解じゃないかな？って感じだったらしく爆弾は今回の話のように投げてます。

雄叫びを上げているが覇気は全く無く無く雇われらしい。こんな危ない仕事して報酬いくらなんだろう？

仁王車

その名の通り仁王の上半身が台座に乗っているような形のカラクリ兵器。

車って付く位だから多分台座の下には車輪があるんだと思う。

前後左右の滑らかな動きが可能。攻撃は腕を飛ばしてくるロケットパンチならぬロケット張り手。しかも鎖の巻き取り式。

中に人が入っているのか居ないのかは……謎。

日の本で多分一番（？）普及してるカラクリ兵器

決着、そして……（前書き）

感想が欲しいな……と思ったり思わなかったり……

決着、そして……

「ミナサ〜ン！スパークザビータイムのハージマーリデース！」

「ズドズドズドオン！」

「な、何だ！？」

突然ザビーの大声が戦場に響いたかと思うとバズーカの弾が俺に突っ込んで来ていた仁王車に降り注いだ。

砲弾の雨をもろに食らった仁王車はあつと言う間に全てスクラップになった。

……所でザビーってさ。本当は俺と同じ転生者じゃねえか？だって今のセリフ……思いっきり日曜の朝のアレだったよな。

「に、仁王車が！」

「破壊されただと！？」

「そんな馬鹿な！？」

何とか三人衆は目の前にあった仁王車四体が一瞬でお釈迦になった事でかなり動揺しているようだ。

「ワタシのカガクリヨクにひれ伏しナサイ！メカザビー、ゴー！」

「……ウイイイイン！」「……」

ザビーの号令と共に林の中からメガホンを両手に装備したザビーと目を不気味に赤く輝かせたメカザビー四体が飛び出した。

……そうか、メカザビー四体も乗っけてたからあんなに荷車重かつ

たのか。

「メシア！メカザビー居るからモウダイジョーブ、勝利はカクジツ！」

そう言つてドスドスとこちらへ駆け寄つてくるザビー。

ザビーが言つた通りメカザビーの戦闘能力は凄まじく敵兵に近づいていってバズーカを発射したりトンファーのように使つてなぎ倒したり大暴れしていた。

唯一の問題はザビーが持つている絶えずザビザビと聖歌を流しているメガホンぐらいだ。

……これにどんな使い道があるんだ？近くで聞かせまくつて洗脳でもするんだろうか？つて言うか自動で歌が流れてる時点でこれプレーヤーの類だろ。

「サアメシア！一気にカーペット敷いチャイマショー！」

「え？え〜と…あ〜…それを言うなら畳み掛けるじゃないか？」

「ソウトモ言いマース！」

「いやそうとしか言わないから」

アホなやり取りをしながら俺とザビーは敵兵の中に突っ込んで行った。

「うおおおお！」

「愛を教えてアゲマショー！」

「うわぁ助け「バキッ！」ザビザビザビザビ…」

「おいどうしたおま「ドゴッ」……ザビー教に入信しよう」

「お前等しっか「ゴスッ」愛つて……何なんだろう」

「ヒイイイ！あのデカい奴の攻撃に当たるな！大変な事に「バキィ

ッ！」ザビ……ウマ……」

お、恐ろしい……ザビーのメガホンの餌食になった者がまるでウィルスに感染したゾンビの如く信者になっていく……

うん、俺はこの現象をザビーハザードと名付けよう。

「マダマダ行きマース！」

「ひえええええ！」

「……これ以上被害を出すべきではないな」

「撤退するか」

「仕方が無い」

「……全員撤退だ！」

しばらく俺達が暴れ回ると敵方は襲うのを諦めたようで次々と逃げ出して行った。

「フウ……ケツコウ信者稼げマシタ。後八馬車のトコ行きマシヨ」

「はあ……はあ……了解」

俺とザビーは敵が完全に居なくなった事を確認すると先程の車の所へ行った。

「オーウ……コリヤ酷い」

「満身創痍……だな」

車の近くに来てみると俺が最初に見た時は数十人居た兵が今や数人になり残った兵もボロボロになって死んだように地面に横たわっていた。

「風魔、お前が守ったのか？」
「……………」

先程と同じく車の屋根に立っていた風魔に聞くとコクリと頷いた。
……………それにしても風魔はかすり傷の一つ所か服に一つの汚れも無しか…流石伝説の忍の名を継いだだけの事はあるよな……………

「フーンフフーン……………」
「ん？ザビーどうした鼻歌なんか歌って……………ってオイ！」

なんとザビーは兵が全員ギブアップしているのを良い事に車の戸を開けようとしていた。

「ナニ？チョット見るダケ、トリヤシナイヨ？」
「信憑性が全く無いぞ」

「マア見るだけタダなんだからオツケー！ザビー教が許すと言ってマース」

「ザビー教ってお前だろーが！」
「オープンッ！「ギイ……………」」

そう言っている間にザビーは戸を開けた。そして中を見たザビーは……………

「オウ……………「パタン」」

すぐに閉めた。心なしか若干怯えているようにも見える。

そして俺の方を向くと無言で俺の肩を掴み車の後ろの戸の方へ引き寄せた。

捕まれた時ザビーの手が震えているのを感じザビーの方を向く。

「どうしたザビー？震えてるぞ？」

「尾張と同じ感じシタヨ。とってもビューティフル、ヤマトナタデココ」

「それ言うなら大和撫子な？何だよヤマトナタデココって…人が入ってたのか？」

ザビーは無言で頷く。流石に俺も気になったので俺も戸に手をかけた。

「あ、開けますよ……」

そう言っただけ静かに戸を開けた。そしてその車の中に居たのは……

「さっきとは違う人……市をさらに来たの？」

「……」

結婚の時の衣装に身を包んだ魔王の妹だった……

「あなたはだあれ？……」

「え、えつとお……あなたを助けた救世主です？」

……俺、何て運が悪いんだろう。

この瞬間俺は今までの行動全てを呪ったのであった……

決着、そして……（後書き）

メカザビー

ザビーそっくりのロボット。その強さは数体居たらフルボッコにされて瀕死に陥る事がある程。

内部の構造が丸見えだというのに仁王車よりも強い（作者比較）
作者がBASSARAで最もキライなモブキャラ。

メガホン

言わずと知れた（？）ザビーの布教用武器。これで倒せばみんなザビー教。

愛とは時に力づくで教えるもの……なのか？

魔王の妹は陰気な人です。(前書き)

お市のキャラって掴みにくい……BASARA3ではもう理解出来ない！

魔王の妹は陰気な人です。

「この調子じゃ時間に間に合わないな……」

「ごめんなさい……」

「いや謝んなくていいから、悪いのは襲って来た奴らだし」

あの後お市さんに話を聞いてみると浅井長政と言う武将に嫁ぎに行く途中だったという事を聞いた。

しかし今は護衛は殆どが手負い。まともに歩ける奴が居なかったの
で俺とザビーと風魔で送り届ける事にした。

と、言う事で車の護衛はメカザビー四体とザビー本人。そして俺と
風魔は手負いの兵達を持ってきた荷車に全て乗せて比較的無事な兵
と共に運んでいる。

「だってみんながこんなになってしまったのもぜんぶ……市のせい」

「ネガティブな考えは止めなつて……死んでつた奴が可哀想だよ？」

「ねがていぶ？」

「悪い方向にばかり考えちゃう事だよ。陰気、根暗つて事だな」

「……市、そう見えるの？」

「ああ、それ以外には見えないな」

「そう……それじゃあ私はねがていぶなのね……だからみんな不幸に
なる」

「……………」

ゲームやってた時の市も根暗だったような感じがしたが直に話して
みると本当に自虐的な発言しかないな。

暗い顔のせいで美人が台無しだよ全く……笑ったら絶対破壊力ある

と思うのになこの顔なら。

「あなたも市の側にいたら不幸になるわよ……」

「そんな事は無いと思うぞ？」

「……嘘、だってさっきの戦いに巻き込まれたんでしょ？」

……ひ、否定できない。

いやでも待てよ？あれはザビーが突然走り出した事から始まったのであってお市さんが不幸を呼んだ訳じゃない。そうだ、ザビーだ。ザビーが悪いんだ！

いやでも車開けたときの感想は正直絶望に近かったというか……

「フフツ、面白い人……すぐに表情が変わるのね」

「……うっさい、これでも俺は色々考えてるんだ」

「……例えば？」

何でそんな事を聞くなこの魔王の妹さんは。言える訳無いだろ！

「本当に面白い人……」

「笑え笑え……」

口元を袖で隠し笑うお市さん。

……ってアレ？お市って笑うようなキャラだったわけ？……違うよな？

イメージでは魔王と同じように狂ったように笑って是非も無し……しか無かったよね？

……貴重な表情を見たな。

「お市さん笑った顔綺麗だから何時も笑ってりゃあいいのに」

「……え？」

驚いたような顔をして俺の方を見るお市さん。何？俺何か悪いこと言った？

いや待てよ、もしかして……

「お市さん？もしかして本心から笑った事……無い？」
「……………」

俺の質問を聞き俯いて黙ってしまってお市さん。

ああやっぱりか……無いんだなこの人。確かに俺との問答で先程笑いはしたがあれはまだ笑顔とは程遠い顔してたしなあ……

「よし決めた、あんたに笑顔を教えてやる！」

「……………何故？」

「いや多分だけどさ？お市さんがネガ……陰気な理由って笑った事……いや心からの幸せってものを感じた事が無いからじゃないか？」

考えても見てくれ、信長、蘭丸、濃姫、極めつけは鎌を持ったヘンタイ。

そして魔王城と言う環境。そんな状況で心から笑えなど殆ど無理と言えるだろう。

あの是非もなしで締める笑い？ノーカンで。

「とーにーかーく！俺がお市さんに本当の笑顔ってもんをいつか教えてやる！」

「……………そう、じゃあ市、楽しみにしてるわね」

「応！何時になるかは分からないけどな！」

「……………本当に不思議で、面白い人……じゃあもう一つだけ質問」
「何？」

「生きる意味……って何？」

……いきなり哲学的な事を聞くなあ、
生きる意味……生きる意味かあ……

「死ぬ事……じゃないか？」

「死ぬ？……何で？」

「だってさ、生きている者は必ず死ぬだろ？それが世の掟だ。生きる意味なんてその課程の中で見つければいいんじゃない？そして見つけたら死ぬまでその道を貫く……死ぬまでさ？」

「フフツ……本当に面白い人。生きる意味が死ぬ事なんて……」

「そうか？まあパツと思いついたからな……まあ人それぞれだろ生きる意味なんて」

「………そうね」

そういった会話をしながら俺達は目的の場所へと進んで行った。

「所でお名前は？まだ聞いてない……」

「あれ！？言つてなかったっけ？」

その後俺達は数刻遅れて浅井が待っている場所へと到着したのであった。

魔王の妹は陰気な人です。（後書き）

お市

魔王織田信長の妹。どんな環境で育ったらこんな性格になるんだろう？ってくらい根暗で自虐的。

一応魔王の血が流れているのかたまに口調などが変わることが…
根の国と言っ暗黒世界を開きその中から出てきた手を使ってあんな事やそんな事……ごめんなさいふざけました石投げないでっ！

……とにかく間違ってもヤンデレ化させたくは無きゃラ。

浅井の正義（前書き）

今回の話では浅井長政が作者の改造を受け盛大にブレイクしています。長政LOVEな人本当にゴメンナサイ。

浅井の正義

「本当に済まなかった……許してくれ」

「いや謝るのは俺の方だ……ついつい本気で……」

「いや、謝るのは私の方だ……気にしないでくれ」

「いやそんな事を言われても……」

今の状況を説明するとお市さんの結婚相手、浅井長政が目の前に居る。

そして俺と長政は交互に謝っていた。今からそうなった経緯を説明しよう。

「貴様！何だその奇怪な集団は……私を馬鹿にしているのか！」

俺達は長政が待っていると言われた場所に着くと馬に乗っていた紅白鎧を着てる奴……長政が俺達の姿を見て怒声を上げた。

うん、予想通りだ。時間に遅れたあげくこんなバカにしたかのような奇怪な集団で来たら誰だって怒るよね。

「いや待ってくれ、これには事情が……」

「問答無用！時間に遅れるならまだしも……悪だ！削除する！」

「ちょー！」

俺が事情を説明しようとする前に長政は馬から飛び降りるとこちらへ突っ込んで来た。

人の話を聞けって言う前に悪って何だ悪って！失礼だなこの紅白野郎！カチンと来たぞ！カチンと！

「誰が悪だこの紅白野郎！」

「ガキイン！」

俺は突っ込んで来た浅井の剣を六叉槍で受け止める。
かなりの衝撃が体を襲ったが師匠に比べればそれ程でも無い。

「紅白だと！私は浅井長政だ！」

長政は飛び上がり俺に向かって跳び蹴りを食らわせて来た。
俺は素早くバックステップで避けると隙が出来る地面に着地した瞬間を見計らい突っ込む。

「くっ……うっせえ！なあにが悪だ！」

長政の胴めがけて槍を突き出す。しかしそれをひらりとかわして俺の攻撃の届かない所に後退し空を剣で十字に斬ると斬ったときに出現した斬撃をこちらに飛ばして来た。

「その無駄口が悪だ！削除する！」

「さっきと理由が変わってるじゃねえかつ！？」

俺は地面に槍を刺し巨大な氷塊を作り出して斬撃を防ぐ。

直後長政が先程の飛び蹴りのポーズで突っ込んで来て氷を蹴り壊した。

……ライダーキックに全く引けをとらない威力だな。流石は自称正義。

「うるさい！今のは貴様の個人的な悪だ！」

「じゃあてめえの悪は理由も聞かずに襲いかかって来た事だ！」

俺はそのまま突っ込んで来た長政を槍で受け止めなぎ払う。
無防備な形で突っ込んだ長政はそのまま吹っ飛ばされて地面に叩きつけられた。

「ぐうつ！私が悪だと…馬鹿を言うな！私は正義だ」

「人を上辺や第一印象で善悪決めつけるような奴が正義？笑わせんな！」

「何だと……」

長政は起き上がると激しい怒りを露わにして俺の方を見る。
俺はそんな事はお構いなしに話を続けた。

「考えても見ろ…何が悪だ？何が正義だ？人にいきなり襲いかかるのは悪じゃないのか？人の話を聞かないことは悪じゃないのか？」

「うるさい！正義の…この日の本の平和の為ならば許されるべき行為…」

「いや違うな…お前は悪だから敵を滅ぼしてるんじゃないか？自分が気に食わないから滅ぼしてるんじゃないか？それで罪悪感が沸かないよう適当な理由を見つけて悪に仕立てる…違うか？」

「ち…違う！私はただ純粹に正義の為に…正義の…全ては正義の為だああ！」

がむしゃらに突っ込んで来る長政。鬼気迫る表情だが落ち着いて対応すれば平常心を失った動きなど手に取るように分かる。

俺は2、3攻撃をかわすとがら空きの胴に渾身の一撃を入れる。
ぐっ！と言う声を出して長政は俺の前に崩れ落ちた。

「くっ…何故…何故だっ……」

「……俺はさ、正義を語る程長く生きてないしそもそも正義が何たるかなんて事は分からない。でもさ、お前の言ってる正義は何か違う。それだけは言えるぞ」

「……………」

俺は気持ちを落ち着け地面に倒れている長政を見下ろし話しかける。長政は黙って俺の顔を見上げると口を開いた。

「では私はどうすれば真の正義に近づける？……それを教えてくれないか？」

「うーん、そうだな……………取りあえず人の話をちゃんと聞くことから始めよう。な？」

そう言つて俺は手を差し出す。長政はそれを見るとフツと笑い俺の手を取り起き上がった。

「……………そうだな、話を聞こう」

その後俺はこのような事になった理由を話した。そして今に至る。

「怪我人もかなり居る事だ。とにかく私の城に来てゆっくり休んでくれ」

「おお、ありがとな」

「オウ！宿代タダの上お城にオトマリ！お節介は煮るモンダネ！」

「煮るじゃなくて焼くだザビー」

お城に泊まると聞いて謎の踊りを踊って喜びを表現するザビー。

……MPがあつたら奪われそうだ。

「これでザビー式の結婚式すれば永遠の愛を……」
「止めい」

ザビーがとんでもないことを口走つたので制止する。

ザビー教の結婚式なんて考えたくも無い。絶対にカオスになるに決まっている。

天からザビー顔の天使が大量に舞い降りザビザビと言う聖歌とパイプオルガンの音の中祭壇に乗ったザビーの目の前で長政とお市さんが……考えたく無い。

「永遠の愛か……いいかもしれんな……」

「デショ！流石ジャステイス！オメガ高い！」

「じゃすていす？」

「アナタの洗礼名デース！ジャステイス浅井！どう？カッコいいデショ？」

「じゃすていす浅井……」

「わーっ！やめる長政戻って来い！それにザビー何時の間に洗礼名付けた！？」

「永遠の……愛……」

「ちよっ、お市さんも！？」

……もうやだ。

浅井の正義（後書き）

浅井長政

無？言？即？殺！

三つ数える内にっ！削除する！

悪と無駄口、削除なり！

と、言うわけで戦国BASARAの正義キャラ浅井長政。

ツンデレ。男なのにツンデレ。作者が始めてみたツンデレ。最初に見たツンデレが男って悲しいよね。

……とにかく正義を掲げているが自分の先入観だけで物事の善悪を判断してしまうはた迷惑な正義の味方。

刺々しい発言が多く端から見ると辛く当たっているように見えるがそれは仲間を案ずるが故。

……何度も言うけどなんてツンデレなんだ！

婚礼の場の乱入者

「ザンネン！もう少しでザビーが…」

「うるさいぞザビー」。この場に立ち会えるだけ光栄と思えよ」

翌日、姉川城ではお市さんと長政の婚礼がおごそかに執り行われていた。

……俺としては朝になったらさっさとここを後にしたかったのだが、お市さんと長政が俺を引き止め反強制的に参列させられた。

だってさ、朝早く俺が嫌がる（ザビー教で結婚式をと叫んでた）ザビーを風魔と一緒に強制連行しようとした時に

「どこか……行っちゃうの？」

お市さんに見つかりました。

何故か涙目になって俺を引き止めようとするお市さん。それで動くに動けなくなった時に長政に見つかって

「貴様！市を泣かせるとはどういう事だ！」

「いや…これは違…」

「悪は削除なりい！」

「「バキイツ！」ギャース！」

その後お市さんが恩人なんだから長政との結婚式に出て欲しかったから引き止めたと言うまで俺は長政にタコ殴りにされ続けた。

そして今に至る訳だ。

「あゝまだ殴られた所ヒリヒリする」

「それはジャステイスの愛ユエヨ！それにドゲザしたんだから許ス

「ノ！」

「……………だな」

そんな話をしている間に終盤に入る。

「それでは皆様…この「まるの到着ぞよ！頭を下げい！」……………何だ？」

突如甲高い声が響いたかと思うと城の外に巨大なやぐらが現れた。その上には何やらきらびやかな平安時代風の衣装を着て巨大な扇を持っている男が立っている。

「この今川義元を婚礼に呼ばぬとはどういう事おじゃ！？それ、我らのひと味違った祝いぶり！うつけ共にも見せるでおじゃ！」

「おじゃ、おじゃ、おじゃ、おじゃ」

「……………」

「大変でございます長政様あーっ」

突然今川義元が現れた事にその場に居た物は言葉を失い全員固まった。

直後慌てた様子で一人の兵が長政の所へ駆け寄ってきた。

「どうしたのだ？」

「さ、先程皆が謎の不気味な軍勢により占拠されました！」

「何だと！？詳しく説明しろ」

「そ、それが突然おじゃおじゃと言いながら同じ服装、顔をした小太りな男がなだれ込んできてあつと言う間に我らは追い出され…」

「それで今はどういった状況だ？」

「それが門を堅く閉じ……………宴会を開いているようです」

「……………」

兵士の答えにこの場が再び沈黙した。

そして目線は一樣にやぐらの上に立って奇妙な踊りを踊っている今川義元に向いた。

「ほっ、ほっ！それ歌えや踊れ！風流でおじゃ」

俺は長政に話しかけようとしたがそこには怒りに身を震わせた長政が居た。

まあ誰だって無断で城を荒らされたら怒るよなそりゃあ。

「これは……許し難き悪！全軍出撃、あの悪を排除する！」

「はっ！」

「私の雄志を見ている市！」

「はい……長政様……」

長政はあつと言う間に鎧に着替えると門を開き外へと飛び出して行った。

「行け！我が理の兵達よ！」

「応！」

兵士達も一人残らず出ていってしまいこの場には俺とザビーと風魔、そしてお市さんが取り残された。

「市……どうすればいいの？」

「ここで待ってればいいんじゃない？」

間違ってもあの変人率いる軍団に長政が負ける事は無いだろう。うん、断言できる。

「でも……市、長政様の……役に立ちたいの……」
「そっか……」

確かお市さんって戦えたよな……

「……武器とか持ってたんの？」

「……うん……一応は……にいさまが役に立つだろうって」

「ふうん……じゃあ出るか？」

「……え？」

「長政は戦いぶりを見ろって言っただろ？それなら外に出なくちゃ……って口実で大丈夫だろ。それに危険な奴が近付いたら俺達が撃退するから心配すんな」

「……やさしいのね……まっけて」

そう言うとお市さんは奥に引っ込んだ。

数分後、俺がゲームでよく見たお市さんの格好で出てきた。

……着替え早くね？まあどうでもいいけど。

「それじゃあ出撃しますか」

「……うん」

今川軍団を削除する！（前書き）

気合い入れて書いたらいつても長くなってしまった……
後ちよっただけ今川を創作します。

今川軍団を削除する！

俺は外に出ると長政が出ていった方向を確認する。

……ふむ、右へ行つたようだな。だとすると……

「……長政は白虎砦に行つたみたいだな、じゃあ俺達は玄武砦の方に行くか」

「長政様を追わないの？」

「お市さん……あの堅物の性格考えてみてよ……戻らされるよ確実に、役に立ちたいんなら長政と別行動しなきゃ」

あの性格だ。お市さんを傷つけないために本気で怒るだろうからな。別行動をするのが得策だろう。

「うん……わかった」

「よし、行こう！」

俺達は左へと曲がり玄武砦へと向かった。

玄武砦に着くと既に入れる状況になっていた。……まさか長政が行つた方向を間違えたか？

そう思いながらも口八丁でどうにかなるだろうと思つて中に入ってみると……

「炎の槍、一！」

「氷の槍、二！」

「雷の槍、三！」

「風の槍、四！」

「闇の槍、五！」

「戦国最強戦隊！五本槍！」「ドカアアアアン！」

「おじやあああああ！」

玄武砦の中では謎の五人組が乱入者の今川の軍勢を撃破していた。……何か激しくデジャヴを感じるんだが。うちの城にも居たよなあんな奴ら。

「俺達五人！」

「長政様に任されたこの砦！」

「何としても！」

「守り抜く！」

「行くぞ！」

「戦国最強砲、発射！」

「ズドン！ズドン！ズドン！ズドン！」

「おじゃぶえええええ！！！」

五本槍はどこからともなく巨大な大砲のような物を持ち出し上に乗ると逃げまどう今川軍に大砲を撃ちまくり始めた。

悲鳴を上げながら砦の外へと吹っ飛ばされていく今川軍団。

俺達はその光景をただ啞然として見つめていた。

……その光景に圧倒されていたのか只単にこの光景がアホすぎて思考が停止したのかはご想像にお任せする。

「見たか！これが正義の味方、五本や」「ズドオー——ン
「ほぎやあああ！」「」「」

今川軍団を一掃し、決めポーズを決めようとした瞬間乗っていた戦国最強砲が大爆発し四方……いや五方に吹っ飛ばされる五本槍。

しばらくピクピクと動いていたがしばらくすると動かなくなった。

「……行こうお市さん。ここはもう大丈夫だ」

「え……でもあの人達動いて無い……」

「大丈夫、正義の味方は絶対に死なないから」

俺はお市さんをうながして砦の外へと出た。

「ここが青龍砦か……よし行くぞ！」

「……はい」

「大暴れスルヨー！」

「……」

俺達は正面から砦へと突っ込んで行つた。

「ん？な、何だ！宴会の邪魔をするな「ドゴッ」「ごぶえー！」

「……「ヒュッ！」」

俺達が突っ込んできたのに気付き武器を構えた門番兵だったが風魔が一気に間合いを詰めて顔に飛び膝蹴りを食らわせた。

「ギイイイ……」

意識を手放した門番兵を放り捨てると風魔は門を飛び越え内側から門を開けた。

「よし、いいぞ風魔！」

俺達は一気に中になだれ込む。するとそこには見るに堪えない光景が広がっていた。

皆狭しと同じ顔、同じ体型、同じ服装（色は違う）の男共が踊り狂っていたのだ。それも平安貴族のような格好で。

先程の玄武皆でも見たは見たが十数名だ。こんな皆にギユウギユウ詰めになる程では無い。

もはや気持ち悪いを通り越して恐ろしい。夢に出てきそうだ。

「市……怖い」

「オーウ、マロが一杯……ザビー頭痛くなってきた」

「……………」

お市さんは俺の後ろに隠れザビーは気分の悪そうな顔をしている。風魔は……別段大丈夫なようだ。

「大丈夫だお市さん、俺が付いてる……行くぞザビー！、風魔」

「こんな怖いトコ一刻も早くオサラバデース！ゴー、ザビー！」

「……………」

俺とザビーと風魔はお市さんを守るようにして突撃した。

「結婚おめで「バコオン！」ごへっ！」

「末永くお幸せ」「ゴスッ」けぶらあ！」

「おめで「ゲシッ！」えぶっ！」

次々と空高く打ち上げられ皆の外に放り出されていく今川軍団。

……なんかぶっ飛ばす度に罪悪感が沸くんだが。

「祝ってくれてるのに……かわいそう」

「おお！お綺麗です」「ガスッ！」えぐう！？」

「……可哀想って言いながら長刀でぶっ飛ばすってどうよ？」

数分後、砦の中には一人の今川軍団を一人残らず放り出した直後浅井とその部下達が入って来た。

「これが最後の砦だ……市！？なぜ此処に？」

「あ……長政様……」

お市さんの姿を見るとすぐさま駆け寄る長政。

「市……どうして外にいるのだ！？危ないだろう？」

「あの……市……長政様の……」

「危ないから今す……」

「あゝほら長政？お前自分の雄姿を見てろって言っただろ？だから俺が護衛なって連れ出したんだが……うっかり道を間違えちゃってな……」

俺がお市さんと長政の間に入りフォローする。

……お市さんは大人しいからこうでもしないと長政に言われっぱなしになっちゃいそうだしな。

「な……」

「で、まだお市さんは長政の雄姿を見て無い訳だ……だからな……」

俺は長政を未だにやぐらの上で踊っている今川の方に向かせる。

「あそこの今川にバシッ！と勝っていい所見せよう……な？」

「し、しかし……」

「だいじょーぶだつて、お市さんの体見たろ？傷一つ付いて無い。俺達に任せろつて」

「……分かった。市、私に付いて来い！」

「はい……長政様……」

……こうして俺の手腕によりお市さんを連れた状態で今川との対決が始まった。

俺達はすぐさま今川が踊っているやぐらの下に移動した。

もう一人しか残っていない事に気付かずのんきに踊り続けている今川。

「ザビー、やっちゃって」

「分かりマシタ！ブッパナスヨ！」

「ドオン！」

「今ぞ！知りける！今川の！」「ドカーン！」熱いでおじゃああああ
……」

ザビーに指示を出し今川に向けてバズー力をぶっ放す。

放物線を描きながら見事に踊っている今川に直撃し悲鳴を上げながら落下し地面に激突した。

「い、痛い上に熱いでおじゃ！何をするでおじゃー！」

頭と尻をなでながら立ち上がる今川。

その目の前にゆっくりと長政は移動した。

「む？なんじゃ！まろは……」

「貴様を……三つ数える内に削除する」

「おじゃっ！？」

長政の言葉に肩をビクツと震わせ後ずさりする今川。俺が居るのは長政の後ろなので表情は分からないが多分かなり怒った表情をして

いるのだろつ。

「三……」

「ひいつ！誰か、誰かまろをたすけるで……何故皆居なくなつてるでおじゃ〜！？」

「二……」

「だ、だれでもよい！まろをたすけてたもれ〜！」

「一……」

「まろが何をしたというでおじゃ！まろはただ祝いたただけだったというのにい〜！」

「無言？即殺！」

「やめてたも「バキイ！ゴスッ！ドカツ！ゲシッ！」プウ〜〜リイ〜ン〜！」「ドサツ……」

今川は長政の華麗な攻撃を受け空中に舞い変な悲鳴と共に鼻水や涙をまき散らしながら地面に倒れたのであった。

「この度は無理矢理押しかけて……謝るでおじゃ……」

「……私も鬼では無い。己の非を認めるなら許そう」

姉川場内ん客間で衣服を正した今川が長政に謝っていた。

あの後俺達が気絶した今川をポイ捨てしようとした所お市さんが曲がりなりにも祝いに来てくれたのに追い出すのは可哀想と言ったので渋々今川を姉川城に入れ介抱したのだ。

その後目が覚めた今川に大泣きされた。理由を聞いた所今までこんなに優しくされた事が無かったそうだと。

……どんな悲しい生活してるんだ今川は。

そんな事を思つて長政と共に部下の一人に聞いた所今川の過去は兄弟の死やそれから始まった家督争い等結構……いやかなり暗かった。その部下が言うにはあんな派手な見かけや馬鹿な言動をしているのは上辺だけで本当は寂しがらしい。

「明日婚姻をやりなす。出たければ出るがいい……」

長政はそう言つと奥へと消えていった。

「……………」

長政が居なくなつてもしばらく今川はじつと長政が居た方向を眺めていた……

今川軍団を削除する！（後書き）

人物紹介は次話にします。

浅井家結婚式、そして別れ…（前書き）

皆さんのコメントを原動力に…頑張るぞ！

浅井家結婚式、そして別れ…

「市に何か贈り物をしたいのだが何を贈ればいいだろうか？」

今川乱入事件の夜突然長政が少し話したい事があると言われて長政に付いていったらこんな事を言われた。

……そんな事を聞かれても正直困る。俺だって年齢と彼女居ない歴が同じなのだ。

「うーん、難しいな……女性が喜ぶ物だったら……くしとかはどうだ？」

「くしか……しかしどのようなくしを贈れば？市の好みは私には分からないぞ」

「俺も分からないぞ……」

「しかも明日渡したいのだ。店に行って吟味する時間も無い……」
「うーん、じゃあどうするか……」

二人で考え込むも女性経験が全く無い二人だ。いい考えが浮かぶ筈も無くただただ時間だけが無駄に過ぎていく…

「もういつその城の女中さんに聞いた方が……」

「そ…そんな事恥ずかしくて聞けるか！だから貴様に聞きにきたのではないか！」

顔を真っ赤にする長政。このヘタレめ！

ほんとこの正義マン強気な所は強気だがはウブな所はとことんウブだな。

「お困りのようでおじゃるな…まろがたすけてやろうかの？」

「うわっ！今川！？」

振り返ってみると俺と長政の背後に今川が立っていた。
さもおもしろそうな顔で俺と長政の顔を見ている今川、なんかウザい。

「おぬしらは女子おなこに贈り物をしたことが無いでおじゃ？によほほほ……ならばまるが贈り物を考えてやろうかの」

口元を扇で隠し笑う今川、人が本気で考えてるのに茶化しに来るとはどういう考えしてるんだコイツは。

「……どうする長政？」

「……聞くだけ聞いてみよう。だが変な案であつたならば却下する」

この状況だと削除する！とか言いそうな長政が話を聞くと！？
……そこまで切羽詰まらなくてもいいんじゃないか長政？

「ほっほっほ……素直でよろしいでおじゃ！ついてまいれ！」
「分かった」

今川の後を付いて行く長政、一応俺も二人の後に付いて行くとザビーがせっせと結婚式場を作っている場所まで来た。

今川が姉川城内に連行された後ザビーが俺の居ない間に熱心に長政とお市さんを説得した事によりザビー教で結婚式を挙げる事となつてしまったのだ。

……本当に不覚だった。あの二分間、俺が目を離してさえないければこんな事には……

「おじゃ！ザビーとやら、ちこうよれ！」

「オー！マロ、ザビーに何かゴヨウ？」

「うむ、ちと聞きたい事があつての」

今川の声に作業を止めこちらに歩いて来るザビー。

「アレ？ジャステイスにメシアも居ますネ、ザビーのお手伝いに来てくれたんデスカ？」

今川の後ろに立っている俺達をみて不思議そうな顔をするザビー。

「違うでおじゃ…おぬし百合の花は持つておらんかの？」

「ユリの花？……一応飾り付けの為に持つてマース」

「それなら後ろにいる長政に譲つて欲しいでおじゃ」

「お花を？別にいいケド…しばらく待つててクダサーイ」

しばらく待つとザビーが百合の花を持つて戻つて来た。

そしてザビーは持つてきた花を今川に渡す。しかしザビーが持つてきたのはたったの一輪だけだった。

「ゴメンナサーイ、ユリの花一本残して全部枯れちゃってタヨ」

「いや、感謝するぞよ！」

今川はそれを受け取ると来た道に戻つていった。

「……で？その花をどうするつもりだ？」

部屋に戻った後長政は今川に問いかけた。

「まさかそれを渡すのでは……」

「その通りでござる！花というものは古来より贈り物としては不動の地位を固めているものでござる！贈り物に困ったら花を渡せ、これは格言でござるよ」

そんな格言聞いた事無いぞ……でも花か。何が好きか迷うよりはマシだな。

しかし何故百合の花なんだ？この近くならいくらでも他の花があると思うんだが……

「理由は分かったが……何故その花なのだ？」

長政も俺と同じ事を思っていたようで俺が思っていた事を今川に質問する。

すると今川は良くぞ聞いてくれたと言わんばかりの顔をした。

「百合の花の花言葉を知っておるかの？」

「……花言葉？」

「花言葉を知らないでござるか？……花言葉とはその花に込められた意味でござる。そしてこの百合の花言葉は純潔……どうじゃ？お主にピッタリの花言葉であろう？」

「そうか？……」

うーん……あっている……のか？

いや一応は純潔ちゃんあ純潔だけど……何か違うよな？

「これを明日お市殿に渡せば好感度が上がるに違いないでござる！」

「そ、そうか……ふむ……」

「ソレデハ、この二人をザビー教の愛の名の下に夫婦であると認めマース！」

夜が明けた次の日、たった一晩で完成したザビー教会で二人の祝言を挙げた。

俺は後ろのバックコーラス（聖歌隊）に無理矢理配備されたのがかなり不満だった。因みに他の聖歌隊のメンバーは五本槍の皆様だった。萎えたよ俺……

まあザビーが婚姻届けをザビー教入信の紙にすり替えようとした所を阻止出来たのはここに居たお陰なのだが。

その後お色直しでは今川がお色直し用の衣装を自分で作った衣装とすり替えるというんでもない事をした。

まあその衣装がなんと第二衣装だった訳で……俺的には納得だった。

その後長政がお市さんに昨日今川に渡された百合の花をプレゼントした。

……お市さんが「うれしい」と言って僅かに微笑んだ瞬間爆発するのではないかと言うぐらいに長政の顔が真っ赤になりそれを冷やかした俺達が怒っているのか照れ隠しなのか真っ赤な顔のままの長政に追っかけ回された。

そんな光景を見てあわあわとしているお市さんであったがどこか楽

しそうだった…これなら笑ってくれる日も近い……かな？

まあそんな感じで騒がしい浅井家の祝言もあつと言つ間に終わり次の日……

「もう行くのか」

「いや、逆に居すぎたぐらいだよ」

俺は朝早くに準備をしてお市さんと長政にここを出ると告げた。するとお市さんが城の入り口まで見送ると言つたので長政も来ると言い今は姉川城の入り口に居る。

「色々ありがとう……救世主さん……また来てくれる？」

「ああ、毛利に書状を渡したらまた元来た道に戻るからな……また寄るよ」

どうでもいいが俺お市さんに一度も名前呼ばれてないよな……この前言つた筈なんだけどどうしても俺が初対面の時言つた救世主って言葉が……あんな台詞言うんじゃ無かつた……

「氏時……何時でも歓迎するぞ」

「あ……突然名前で呼んだな……」

「さ、最後ぐらいはいいだろう！さっさと行け！」

そう言つてピッツと横を向く長政。
男のツンデレってどうよ……

「それじゃあな！」

そう言つて俺達は馬に乗った。

…ちなみに馬は今川が長旅には必須だと言つことで貸してくれた。
これには本当に感謝だ。馬を使えば今までここに居た分の遅れも簡単に取り返せるだろうからな。

こうして俺達は長政とお市さんに見送られながら姉川城を出た。

「さてと、目指すは中国、安芸を目指しますか！」

浅井家結婚式、そして別れ…（後書き）

戦国最強戦隊五本槍

自ら最強を名乗る傭兵五人組。

それぞれ異なる属性を持った槍で見事（？）な連携プレーで攻めてくる。

自分達がピンチになると戦国最強砲なるものを出現させ立て続けにぶつ放してくる。そして最後に自爆する。

そんなネタキャラ確定の彼らだが一応一人一人がかなり腕の立つ槍の達人で戦国最強と名高いホンダム相手に戦隊全員でガチバトルを繰り広げていたりする。

戦国最強戦隊……その看板に偽りは無し。

今川義元

おじゃ！が口癖で巨大な扇を手に風流な事が大好きな駿河の戦国大名。

この小説では現時点で徳川が居る三河を手中に収めている。

見た目がアレな上空気を読まないバカ発言を乱発する。

その為周りからの評価は非常に低いとしか言いようが無く都に上れぬなどと言われるがホンダムが居る三河を手中に収めた手腕は……推して知るべし。

今川にせ元

今川の変わり身。太っている為お世辞にも本人に似ているとは言い難い。

どうやら薬の影響でこの姿になっているらしい。

その副作用は強力で妻と酢昆布の区別が付かなくなる程。

今はその副作用を無くした上本人と全く変わらぬ姿になる新しい薬を開発中らしい。

いつその薬を霧状にして敵軍にばらまけばあっさりと敵を壊滅させられるんじゃないかと思ったのは俺だけだろうか……

疫病神ザビーの加護再び！（前書き）

ザビー 特性 ものひろい（厄介なものに限る）

オリキャラ出現。そういうのが苦手な人は……氏時もオリキャラか。

疫病神ザビーの加護再び！

姉川城を出発して数日、西へと進む俺達は今川が貸してくれた馬のお陰でかなりの好調だった。

今俺達が居るのは京の都。今も昔も変わり無い雅で風流な所である。……しかし俺は今川じゃ無いので全く興味が無い。なので観光などせずさつさと京などおさらばしようと思った矢先……

「サツキ道端の林の中で見つけた所可哀想にナツテ拾いマシタ！可愛いでシヨ？」

疫病神（認定）ザビーがまたしても不幸と言うか……厄介事を持ち込んで……いや拾って来た。

「なあザビー、おまえの気持ちは良く分かる。愛を掲げているお前はそれを見過ごせなかったんだろうな……でもな？」

俺はザビーが連れてきたと言った奴に目を向けた。
……正直落ちてたんじゃ無いだろこれ。

「ガウ」

「……？」

「何で虎と人（しかも女）なんだあああ！？」

「……はあ、大体の事情は分かった」

その日の夜。近くの町の宿に泊まった俺達はザビー曰く捨て猫（猫じゃねえ虎だ、しかもホワイトタイガー）の飼い主（飼い主居る時点で捨て猫じゃないだろ……）に話を聞いた。

因みに飼い主の女性は風魔と同じ無口属性で殆ど話さなかったが俺が風魔で鍛え上げた読心で理解することが出来た。

……風魔を相手にした俺の読心スキルは半端じゃないぜ！

「……………分かったの？」

「ああ、理解したから大丈夫だ！」

「……………すごい」

驚いたような顔をする女性。そりやそうだ。風魔は別として一般的な人が無口だと話を理解するのがパズルみたいになるからな…

まあ俺としてはポツポツとだが喋るので風魔よりは数段やりやすかった。

さて、分かった事はこの女性の年齢は十七で名前はしぐれ、下野国、神流川周辺を拠点としている宇都宮氏の家臣の娘らしい。

……下野国は北条家の領土のすぐ北に行ったところにある。

そう言えば宇都宮家の当代は何でも地の利と獣を使った戦術を考えているらしい。

その獣がああ白虎と言う訳でしぐれさんの祖父はその白虎を扱う虎操兵らしい。

そしてその虎が何故京という場所にいるか、そして何故虎操兵の祖父ではなく孫のしぐれさんかというと…実は虎が上手く扱えないらしい。

何それと言いたくなつたが当主の宇都宮広綱が行つた言葉、それは

「虎を扱えない？ 操る方法を考えるな！ 感じるお！ ホアタア！」

……今川を超える馬鹿発言だつた。

どうやって動物を操る方法を感じるんだよ、百獣の女王と名高い前田家の奥様でもあるまいし…

まあそう言う事で「だめだこの主…… とうにかしないと」状態となつた家臣一同は何故か虎と一番スキンシップがとれていたしぐれに虎を操る方法を教えてくれる者が居ないかと探した所、九州の南端の薩摩藩は虎の扱いが上手いという事で早速一番しぐれに懐いていた虎と共に書状を持たせ旅に出したそうだ。

……色々疑問は残るがとにかく無口な彼女が虎操術を覚えても教えられないんじゃないか？ と思つた俺だつた。

「で、その道中にお金が尽き大道芸まがいの事をやりながら路銀を稼いでいたがそれも尽きて行き倒れた所をザビーにめざとく見つかった訳だな」

「……………」

……はあまあ何だかんだ言つてもで宿に入れて話聞いて休ませてる時点で俺も甘ちゃんなんだよな。

まあ金銭面は俺とザビーの手持ちで十分すぎる程あるから一人と一匹増えてもどうって事無いけど……

って何で連れていく事前提になつてんだ俺！……はあ、本当に俺は甘いな。

「……………これ」

「へ？……………何？」

俺の困った顔を見ると懷から一枚の紙を取り出すしぐれさん。俺はそれを受け取り内容を読んでみる。

「……………希望」

普通に聞くと誤解を招きそうなので今のを訳すと

「その紙に書いてある内容を最後の希望と思いここまで来たのだから行き倒れてしまった」

だ。

……………これぐらい出来ないと風魔との対話は出来ないぞ？風魔との会話じゃなくて読心だからアレ。

「本願寺筋肉祭り…優勝者には50万両…なんだこれ！？」

「ン？どうしたのメシア？……………何コレ？面白ソウデスネ！」

「え？ちょ！ザビー！？」

ザビーは俺の持っている紙をひつたくると食い入るように紙を見つめる。

今更だがザビーはこの国の文字分かるのか？

「殆ど分かんないケドお祭りダツテ事は分かりマシタ！シユツジヨ
ーしましょうメシア！」

「……………はい？何言っただザビー。俺は早く安芸に……………」

「エツト必要事項は名前と性別？メシアとザビー、二人とも男ネ！
バンダナボーイ、メシアと私のエントリー頼みマース！」

「……「ヒュッ」」

「えっ！ちよっ！？待て、待つんだ風魔！風まぁーっ！」

こうして俺はまた足止めを食らうのであった……

疫病神ザビーの加護再び！（後書き）

白虎

猛獣。

ホワイトタイガー。鳴き声で敵を怯ませその鋭い爪や牙で攻撃して来る。

BASARA3では公式サイトで巨大兵器の欄に居るくせに仲間武将として一緒に連れて行ける。

……武将じゃないだろ。

虎操兵^{しぐべ}

白虎と共に出現する白虎を操っている兵士。

虎の頭部を模した頭巾（兜？）を被り服装も白虎の毛皮で作られている。

唾の先に刀が三つ付いた猛獣の爪を意識したと思われる特殊な刀を使う。

……こいつを倒したからって白虎がどうなる訳でも無い。

しぐべは虎操兵では無いが一応同じ服装、同じ装備。

髪の色は白。目の色はスカイブルー

無口で単語レベルしか話さないが氏時は普通に言いたい事を鮮明に理解出来る。

本願寺筋肉祭り！（前書き）

……気合いを入れすぎたせいかなり長い。誤字などがあったら教えて下さい。

本願寺筋肉祭り！

日本の本の仏教の聖地である本願寺。

しかし今は金と筋肉を崇拜する墮落と腐敗を極めた所になっているらしい。

しかしいくら墮落しようとい日本中に広まっている仏教の総本山なものだから金だけは大量にあり寺も無駄に豪華らしい。

「筋肉を愛する者達よく集まってくれた！拙僧が本願寺顕如である！」

そして俺達は今その本願寺に居るそして周りには俺の体格を大きく上回る筋骨隆々の数十人の男達。

理由は……うん、ザビーがね……訳分かんない祭りに俺をエントリーしちゃったんですよ……まあ悔やんでもしょうが無いのでこの世にも珍しい光景を目に焼き付けておくことにしよう。

ここを一言で表すなら金だ。金以外あり得ない。

屋根の瓦は全て金。扉も金。寺の中など金一色だ。俺も人だから金が嫌いな訳じゃないがここまで来ると目が痛くなる。

そして今喋っているのはここ本願寺の法王である本願寺顕如だ。

傲慢がめつそうな顔金色を主体とした豪華な服、服の合間から見えるはちきれんばかりの筋肉。

その姿は今の墮落した本願寺のイメージピッタリだ。

「さて、皆が集まった理由は……聞くまでもないな！それでは祭りの規則を言っ！よく聞いておけい！」

顕如が手をパンパンと叩くと後ろから巻物を持った僧が現れそれを

顕如に渡した。

それを開くと顕如は内容を読み始めた。

「第一回戦は見た目での美しさを競う。審査は本願寺の僧が行う。第二戦。これが本戦となり見物客の前で戦い頂点を決める。本戦の詳しい説明は勝ち抜いた者にする……以上！」

……思ったんだがこの紙を持ってたしぐれじゃ絶対出れないだろこの祭り。

肉体美を見るって時点で渡されるものって言ったら……ねえ。

「それでは予選を行いますので皆様用意された服をご着用下さい」

そう言われ渡されたのは褌だった。やっぱりね、この時代でも筋肉見るのは下着一枚か……と言うか服じゃねえだろコレ。

……まあいいか。恥ずかしいのはすぐ終わる。俺は細身だし予選落ちだろうからな。

「……何で俺は勝ち抜いた」

運命の女神様が居たら俺は確実に呪ってやる。何と俺は勝ち抜いてしまったのだ。

因みに同じくザビーも勝ち抜いている。まあそれは分かる。しかし何で俺が……

「え〜と、残ったのはコレで全員か。それでは本戦での規則を言うぞ、よく聞いとれ！」

そんな事を考えていると再び顕如が俺達の前に現れ再び巻物を取り出すと読み始めた。

「え〜と、本戦ではお前達全員とこの寺の僧とで外に用意した専用の場所で戦って貰う。お前達が残ったら優勝。場に残っている者に50万両じゃ！しかし……」

顕如は巻物を控えていた僧に渡すと俺達を見回しニヤリと笑った。

「しかし残った一人一人に50万両を渡す訳では無い。残った全員で50万両じゃ。全員で力を合わせて安全にいき少量ながらも賞金を手に入れるか蹴落とし合い多少危険でも賞金を独り占めしようとするかは貴様等に任せる……以上！試合開始は一刻後じゃ！」

そう言うとき顕如は寺の奥へと消えていった。

その後全員で話し合った結果一応は全員で共闘するという形となった。

そして一刻後……

試合開始の合図と同時に筋肉僧達は団子のようなものを取り出し口に放り込んだ。すると……

「……………又アーツ！」「ボンッ！」「……………」
「なっ！？」

元々デカい筋肉僧達がさらに一回りデカくなった。何か鼻息も荒くなってるような……

「本願寺僧の筋肉玉だー！筋力が大幅にアップした相手にどう立ち向かうのか今から楽しみです！」

「……………ウオオオオオオ！」「……………」

え？何！？これってドーピング有りなのかよ！

「何だ！？あんなの所詮見かけ倒しだろ！」

「フンッ！」「ブンッ」

「「ゴスッ」ぶべええええ……………」

「おーっと？いきなり突撃した一人が場外に吹っ飛ばされたー！残り9人になってしまいました！」

……………一番ガタイのいい男が死亡フラグ的な台詞を吐いた直後一番前にいた奴にアッパーを食らい宙を舞った後堀へと落ちていった。

……………何コレヤバいんだけど。

そして筋肉僧達が一斉にこちらを向く。

「……………フオオオオオオ！」「……………」

「ギヤアアアア突っ込んで来たあああ！？」

まるで壁が迫って来ているようだった。あんなムサい男達に突っ込みたくなかった俺はもう無我夢中だった。

一番先頭に居た奴の伸びてきた手を掴んで背負い投げをして闘技場の外に放り出した後素早く後ろに立っていた筋肉僧2人の頭に回し蹴りを食らわせてノックアウト。

今度は三人で取り囲んで押し潰そうと突っ込んできたが俺の体に触れるか触れないかの所で四メートル程ジャンプした。

そのまま俺は勢いをつけて落下しぶつかり合った事で密接していた頭を踏みつけ地面に叩きつけた。

その後今度は5人がかりで来たのだが……その先は覚えていない。ただその激しい戦いの中俺が思ったことは一つだけだった。

子供の頃師匠に風魔流の体術を教えて貰っていて良かった……と。

「はあ……はあ……終わったか？」

無我夢中で襲い来る筋肉僧を倒しまくっているといつの間にか襲って来なくなっていたので俺は周りを見回した。

すると俺は筋肉僧達の屍（気絶してるだけ）の上に立っていた。

そしてその小高い山の上から見渡すと肩で息をしているザビーと俺と同じく細身で予選を通過した男性が立っていた。生き残りはそれだけだった。

「そこまで、そこまでじゃーっ！ぐあっはっは！今年は特に見事な肉体の舞を見せて貰った。いや満足満足」

会場全体に本願寺の声が響き渡る。

…… ああ、終わった。

「それでは今年この本願寺筋肉祭りで最高の肉体を披露してくれた「バアン！」なんじゃあ！？」

突然大きな音が鳴り響いたかと思うと先程筋肉僧達が来た方の橋が下り黄金色に光輝く仁王車2台が乱入して来た。

「大変です顕如様！我々が作った黄金の仁王車が暴走して……」

「分かっとなるわい！今それが乱入したんじゃ！」

顕如が何やら部下の僧と話しているがこっちはそれ所じゃない。筋肉僧共と戦ってただでさえ疲れ果てているというのに今度は仁王車

……

「ガラガラガラガラ……」

「う、嘘お……」

しかもこっちに照準定めてるし！
くそっ！体力が……足が動かないっ！

「少年下危ない！」

「！？」

先程の男性が何やら正義の味方のような台詞を言って俺の前に立った。その男性は仁王車と向かい合う。

「おい、危険すぎるぞ！」

「危険だと？何を言ってる……俺は無敵！無敵の主人公！主人公がやられる筈がないだろう！？」

「……………」

何だろうこの存在自体が出オチで死亡フラグな男性は。

「行くぞ！俺は無敵の直江か「バッチーン！」ほげえええええ！」

拳を振り上げて突っ込もうとした瞬間黄金の仁王車の張り手を食らい吹っ飛ぶ自称無敵の主人公。丁度俺の方へ突っ込んで来たので疲れきった体で必死に彼を抱き止めた。

「なんてこった……無敵なのに……やられるとは……………」

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫だ…知ってるだろ？主人公は……死なないもんだ！はあああっ！」

「お、おい！」

無敵の主人公は俺から離れると再び仁王車に突っ込んでいった。

「「ドオン」ふっ！「ズドン」でやあっ！」

無敵の主人公は仁王車の張り手をかわすと仁王車の台座に乗るとあつと言つ間に一番上までよじ登るとおもむろに仁王の頭を掴んで右へ左へと捻り始めた。

あの後頭如と僧兵達で残りの一体を緊急停止させた後俺とザビーは頭如から賞金として50万両を貰った。

そしてその優勝賞品として先程暴走した仁王車を貰った（押し付けられた）。

アレだ。絶対暴走するような不要品要らないからあげちゃえ的とかだろ。これだから金持ちは……

その後俺達は医者所へ向かった。

「大丈夫か主人公？」

「だ、大丈夫だ……」

そこには包帯を前進に巻いた無敵の主人公が居た。

爆発に直に巻き込まれたというのに奇跡的に生きていたそうだ。流

石主人公。

「ほい、あんたの取り分。これで傷治せよ」

俺は賞金の半分を彼の枕元に置いた。

「こ、こんなに……」

「まあ俺の危ない所助けてくれたしな」

「くっ…この恩は絶対に忘れないぞ少年！俺は無敵の主人公！直ゲ
フツゴフツ！」

俺はむせてゲホゲホやっている無敵の主人公を後目に家を出た。

「半分もアゲチャウなんてメシアもお人好しサンネ！」

「まあ曲一応危ない所助けてもらったしな」

「……お金」

「ガウ」

「お前らの宿代残りで足りるだろ？……もう行こう、これ以上厄介事は御免だ！」

「ソウデスネ！ザビーも早くオウチに帰りたいデス！」

こうして俺は不思議な仲間を加え再び安芸へと向かうのであった。

「無い！無い！拙僧が仁王車に隠しておいたへそくり500万両が無い！……はっ！もしかあの仁王車が……ぬおおおおおお！……！」

「……氏時」

「ん？どうしたしぐれ？」

「……台座、お金」

「何だと！？」

本願寺筋肉祭り！（後書き）

本願寺顕如

金じゃ、金じゃ、貯金じゃー！

金と筋肉をこよなく愛する本願寺の法王。並の戦国武将よりも兵力、財力がある。

本願寺は内装は金を主体としたきらびやかな作り、僧達皆ムキムキの体育会系で本当にここは寺なのかと疑いたくなる。

無敵の主人公

何故かあの筋肉乱闘の中生き残っていた自称無敵の主人公。

無敵で主人公の筈なのに非常に弱い。主人公としたら永遠の1Lvだろう。

やっと安芸に着きました

「やっと………やっと安芸に着いた………」

ザビーと出会い浅井領で浅井？織田の結婚式に首を突っ込みそしてしぐれと虎の出会い、本願寺での最早祭りとは呼べない武闘大会。そしてそこで手に入れた何故か大金が入った黄金の仁王車。

……長かった。旅に出た当初は俺と風魔だけだったのが今は奇怪な服を着た巨人、虎とその繰者、上半身が仁王の黄金色の兵器が居る。この一行を見たら大道芸人の一座と言われても何らおかしくない。

「ふう……この書状を毛利に渡せばこれでこの旅も終わり。後は小田原に引き返すだけだ………」

ザビーやしぐれは九州に行くのでここでお別れという事となる。グッバイ疫病神！これで厄介事ともおさらば、小田原までの道は安泰という訳だ！

「それじゃあザビー、俺はこれから用事を済ませてくるからこの近くの宿で待っていてくれ」

「ア、ザビーもちよつとココにオトモダチが居るから顔見せしてくるヨ」

「そつか、じゃあしぐれは先に宿に行っていてくれ。お前が居る宿はすぐに分かるだろうし」

「………分かった」

そうして別々に別れる俺達、ふう、お爺様に渡された書状さえ渡したら明日にでも小田原に帰るぞ！

「ふむ…… 同盟の件、確かに承諾したと北条に伝えよ」
「……はい」

そして場所は変わり高松城。俺は毛利家の当主毛利元就にお爺様からの書状を渡した。
毛利は書状を一通り読むと近くに居た兵に筆と紙を持ってこさせ返答の書状を書き俺に渡した。

それにしてもこの毛利元就という男、心が全く読めない。俗に氷の面と呼ばれているのもうなずける。
それにこここの空気は何故かピリピリしてるしそれに毛利の射抜くような冷たい視線が痛い。

俺が毛利軍の家臣だったら二日とかからずストレスで確実に胃潰瘍になる、確実にだ、これは断言出来る。

こんな環境で毛利の家臣は良く仕えているなと思うよホントに……

「それにしても…… 何故今回に限ってこのような形で書状を寄越した？前まではいやに無口な忍を使って書状を届けていたであろっ？」

「は？…… 俺は何も」

いやに無口な忍…… 風魔か！

しかも前回までって何回も毛利に書状を出してたのかよ！

「知らぬか…… まあよいわ、我が望むは中国の安泰のみよ、その書を持ち早々に国へ帰るがいい」

そう言つて毛利が立ち上がりその場を離れようとした時一人の兵が慌てた様子で駆け込んできた。

「も、元就様……た、大変でございます！」

「何事か……言つてみる」

「そ、それが……元就様の“ふれんど”と言う男が城に押し入つて……」

「な……何だと!？」

毛利は“ふれんど”という単語を聞いた瞬間顔が青ざめ明らかに動揺したような表情になる。

……ふれんど? そんな単語を使う奴と言つたら一人しか居ない。もしかして用事つて言うのは……

「お久しぶりですタクティシヤーン!」「ズドォーン!」

襖をバズーカで吹っ飛ばしザビーが現れた。

……やっぱり。

「なっ……貴様何故生きている! 報告では船に乗り消息が途絶えた筈……」

「何言つてるのタクティシヤン? ザビーはどこへ行つても不滅デース!」

そう言つてビシッとポーズを取るザビー。毛利はそれを見て後ずさる。

そして後ろにあつた輪刀を手に取るとザビーの方へ向けた。

「食らえ!」

ザビーめがけて走り寄ると輪刀を二つに分解し斬りかかる毛利。それをザビーはバズーカで受け止めた。

「オウツ！タクティシャンどうしたの！？何だか様子がオカシイヨ！？」

ザビーは輪刀を押し返す。

「くっ……我が崇拝するは日輪のみ……二度と……二度とあのような宗教に毒されてなるものか！」

毛利は輪刀を自分の頭上に投げるすると輪刀の中心に光が集まりレーザーのように発射した。
さながら太陽光線だ。

「これが日輪の力よ！焼け焦げるがいい！」

そのまま光のレーザーはザビーに向かって行く。

「タクティシャン！落ち着いテ！」

「ズドン！」

しかしザビーはバズーカを輪刀に向けると数発バズーカを発射し撃ち落とした。

そのまま輪刀は遠くに弾き飛ばされる。

「何っ！？」

「タクティシャン……アナタ愛がナイヨ……再び愛に目覚めさせてあ

げまショー！」

「パアアアアア……」

「よ、止せ、やめろっ！」

ザビーの声と同時に日輪とはまた別の光が差し込みザビー顔の天使5体が毛利の周りを取り囲む。
毛利は必死に振り払おうとするが避けられ腕をがちりとホールドされる。

「さあタクティシャン！愛に目覚めナサーイ！」

そう言うと同時に床の畳からザビーの顔が書かれた巨大な扉が毛利の目の前に現れた。

……何アレ？俺の幻覚か？いや、幻覚だ幻覚に違いない！だって畳からあんな扉が生えてくるなんて……いやザビー教なら有りか？

「ギイイイ……」

扉がゆつくりと開きまばゆいばかりの光が差し込む。

「や、止めよ！ザビー教に毒されながらも僅かに残った日輪を信仰する心で知謀を働かせ船でどこぞへと流した筈であつたのにこんな……こんな……「パアアア……」ぐあああああ！」

まるで悪が浄化されるような光景だがその聖なる光となるものがザビー教だ。浄化じゃない。洗脳し直してるんだ……

「我が名……我が名は……サン……デー……」

「そうデース！サンデー、ザビー教のタクティシャンとして再び愛

に目覚めるのデース！」

「ザ……ビー……さま……」

ってそんな事考えてる場合じゃない！このままだと毛利がザビーの餌食に！

「止めろおー！」

俺は全力で毛利の元に走り寄り押さえつけていた天使を殴り飛ばす。天使が居なくなった事で支えを失い崩れ落ちる毛利を俺は抱き止めた。

「大丈夫か！しっかりしろ！」

「うぐっ……あの扉を……あの扉が開ききる前に……閉じてくれ……」

「あ……ああ分かった！」

俺は毛利をそつと畳に下ろすと目の前の殆ど開ききった扉に手をかけた。

「「ザビザビザビザビ……」くっ、うおおおおおおお！」

「ギイイイイ……ボタン」

扉から流れ出てくる光と洗脳曲に一瞬頭がクラツと来たが必死にこらえ俺は扉を閉じた。

すると扉は地面へと沈んでいった。

「オー！何で邪魔しちゃうのメシア！？」

「人を勝手に洗脳するな！」

「ううっ……我は愛の戦士サンデー……毛利……」

「オー、タクティシャン！愛に目覚めマシタカ？」

「ザビー……様……」

「うおっ！？しっかりしろ！扉は閉まった！正氣に戻れ、戻ってくれえええ」

…この後駆けつけた毛利の家臣達と共に必死になってサンデー毛利状態を直した。

もうザビーと一緒に居るのヤダ……

やっと安芸に着きました（後書き）

毛利元就

毛利家の安泰のみを考える中国の戦国大名。

自身を含め兵全てを駒としか捉えていない冷酷な策略家。勝つためなら多少の犠牲もどんな作戦でも使う。

その兜の特徴的な形からオク「ピー」と呼ばれる俗称が付いている。兵など所詮捨て駒よ！

サンデー毛利

ザビー教の戦略情報部長だ！

その優れた知謀をザビー教のために惜しげもなく使うぞ！

やっとこれで帰れ……る！？（前書き）

これだけ話数出てるのに主要キャラが全く出ないのも悲しいな……

やっとこれで帰れ……る！？

毛利ザビー化事件の次の日俺は港へと来ていた。
理由は一つ、ザビーとしぐれを見送る為だ。

俺は毛利に書状を渡して来いと言われただけなので九州に行く理由は無い。

……くどいようだが何度でも言わせて貰う、これで疫病神ともおさらばだぜ！

「貴様も居たか」

「あ、毛利殿」

俺はザビー達が乗り込むやけにでかい船を眺めていると後ろから数人の兵を連れた毛利が歩いて来た。

「何だ？貴様もこの船に乗るのか？」

「いや、見送りだから乗らないです」

「そうか、それならば良い」

「？」

何が良いんだろう？毛利もザビーの疫病神っぷりを良く知っているのか？

「それと昨日の事は他言無用ぞ……良いな」

「分かってます」

流石に冷酷な策略家として名が通っている中国の大名毛利が奇天烈宗教団体ザビー教に入っていると隣国に知られたら毛利家の評価が

間違いなく地に落ちる。

毛利家の安泰を第一に願う毛利にとってこれほど恐ろしい事は無いだろう。

「本来北条の者である貴様は即刻殺す所を特別に見逃すのだ、その事をゆめゆめ忘れるでないぞ、良いな？」

「分かってます」

その特別になった理由は昨日毛利を助けたからなんだけどね。なんだかんだ言いながらも昨日は城に泊まっていけと言われ一番良い部屋で一泊させて貰ったし感謝はされているんだと思う。

「オウ！居ましたねメシア、それにサンデー！」

「ザビー様……待て、メシア？……貴様も洗礼されたのか！？」

ザビーが俺と毛利の洗礼名を呼びながらこちらへ向かって歩いて来た。

毛利は俺の洗礼名を聞いてまさかという顔をして俺を見る。

「あ……はい、成り行きで」

「……貴様正気か？」

「これでも精神状態は普通です」

「あり得ん……我でも完全に毒された時は……思い出したくも無い」

そこまで言つと頭を抱える毛利。相当な黒歴史らしいな。

「それじゃあ行きますよメシア、それにサンデー！」

「「は？」」

ザビーは俺と毛利に近付くと俺達の腕をがっちり掴んでニコリと

笑った。

俺はその瞬間背中に寒気を感じ毛利は顔から汗が滝のように流れ出て小刻みに震えていた。

「ザ、ザビー様…昨日言ったように我はこの中国で布教を…」

「何言ってるのタクティシャン！貴方はザビー教戦略情報部隊長デシヨ？一緒にザビー城に戻りマース！」

「え？俺は？」

「貴方はザビーのボディーガード兼側近デース！」

おめでとう！メシア北条はザビーの側近にランクアップした！って嬉しく無えよ！

ほらもう毛利なんてこの世の終わりのような顔をしてるし！

「でも俺まだ宿に荷物置いてるから取りに行かな…」

「あそこにあった荷物はすべてあの船に積み込みマシタ」

ナンテツコタイ！荷物を取るには船に乗り込むしか無いじゃないか！嫌だあ！もうザビーが巻き起こす厄介事の旋風に巻き込まれたくない！あー！

「サアお二人サン、ザビーと一緒に行きまショウ！」「ズルズルズル…」

「う、うわああああ小田原ああ！」

「諦めよ北条の者、既に詰んだ」

「毛利殿諦めないでええええええ！」

こうして俺と毛利は船に乘せられ九州へと（無理矢理）旅だったのであつた。

「ゴオオオオオ！」

「何であああああつ！」

九州へと向かって出た船、しかし不幸は突然起きた。先程までは晴れていたというのにあつと言う間に空が曇って雨が降り出し大シケとなったのだ。しかしそれだけでは無い、さらに不幸は重なった。一人の船員が慌てた様子でこちらへ駆け寄ってきた。

「た、大変だあ！船底に穴が空いたあ！」

「嘘お！」

「このままじゃあ九州に着く前に沈んじゃう！この海に投げ出されたら一巻のおしまいだあ！」

俺は急いで船底へと向かうと確かに船底のあちこちから水が噴水のように吹き出していた。

ヤバい、非常にヤバい。このままだと俺達は確実に海の藻屑となる！

「毛利！何か良い案はないか？」

俺は船の船首の方に立っていた毛利に話しかける。しかし虚ろな目で前を向いてブツブツと何かを呟くだけで全く返事がない。

「……………」

「ん？何だ？」

俺は激しい雨の音の中毛利が呟いている事を必死に聞き取った。

「今度こそザビーを亡き者に出来ると思うていたのにこんな事は計算していない計算していないこの使えぬ捨て駒共め日輪よ我に加護を日輪よ我に日輪日輪日輪……」

毛利は絶賛乱心中でした。

「おい！これをやったのお前かぁ！それに今黒雲で空覆われて太陽出てないから！正気に戻れ毛利いいい！」

肩をガクガクとゆするも全く反応を示さない毛利。

……仕方ない。このまま放置するか……

「おいみんな！何でもいいから桶か何かで水を出来るだけ出してくれ！」

「……………分かった」

「ガウ」

「ザビーも手伝うヨ！」

「……………分かりやした！……………」

その後全員で必死に水を汲みだし船底の水は膝あたりまで減った。

……そろそろだな。

「よし、みんなもう大丈夫だ！後は俺が何とかする！」

俺はそう言つて六叉槍を手にとると船底に下りた。

「凍れっ！北条家氷結奥義いっ！」

俺は冷気を込めた一撃を水に振り下ろした。すると船底に溜まっていた水が一瞬で凍り付く。これを一定時間毎にやればもう水は入って来ないだろう。

「よし！後は九州に向かって舵を取るだ「バキッ！」なっ！」

俺が甲板に出た瞬間この船の帆がどこかへ飛んでいってしまった。……嘘だろ。

「誰か助けてえええええ！」

俺達を乗せた船はそのままどこかへと流されて行った…

漂着、石垣原坑道（前書き）

二日程お盆で電波の届かない所へ行くので連載停止します。

漂着、石垣原坑道

「うゝん……ここは……」

俺は暖かな光を感じて起きあがる。どうやらいつの間にか眠っていたらしい。

船は一体どうなったんだ……そう思った俺は船の外を見る。すると船はどうやらどこかの浜辺に打ち上げられているようだった。

まあ考えていても始まらない。俺はまず周りで倒れている奴らを片っ端から叩き起こした。

全員を叩き起こした所で今の状況を説明し一応この近辺を探索する事となった。

「所でザビー、本当なら何処に着く予定だったんだ？」

「ソーリンの所へ行こうと思ってマシタ」

「ソーリン？」

「ソーリンとは大友の事ぞ。豊後の戦国大名でザビーに心酔している餓鬼よ……」

目が覚め乱心状態から回復した毛利がフォローを入れてくれた。流石元ザビー教徒、よく知っている。

そんな話をしていると一人の船員がこちらへ走って来た。

「おーい！でかい洞窟を見つけたぞ！人工の物みたいだ！」

「！ 本当か！？」

「ああ、早く来てくれ！」

「分かった！今行こう」

「……………こりや凄い」

船員に付いて行くとかなりの大きさの洞窟が現れた。

近くの地面は何かが通ったと思われる踏み固められた道が出来ておりこの中に何度か出入りしているような形跡が見られる。

そして入り口の近くに壊れた状態で放置された掘削道具やトロツコ等が放置されている事から十中八九誰かが何らかの目的の為に掘られた穴だろう。

「どうします？……入りますかい？」

船員の一人が俺に聞いてくる。

「入ろう。人が居たらここが何処かと聞けるし、まさかいきなり攻撃してくる事は無いだろ」

「へいつ」

こうして俺達は巨大な洞窟の中へと進んで行った。

途中暗くなってきたので地面に落ちていた松明を拝借して奥へと進む。しかし掘削道具やトロツコなどは見かけるが人は一切見かけない。そんなこんなで洞窟に入ってから十分程経った。

「思ったより深いなこの洞窟」

「潜って既にかなり経つ、ここに人は居ないと考えるのが妥当であるろう？」

「そうだよなあ…じゃ」

「ガラガラガラガラ……」

「へっ!？」

じゃあ戻ろうかと言おうとした瞬間洞窟の奥から何か物音が聞こえてきたかと思うと巨大なトロツコがこちらに向かって突っ込んで来た。

「みんな避けるおお!」

「「「「うわあああ!」「」「」」

「キイイイ……ガタン!」

全員が突っ込んできたトロツコに驚き飛び退くとそのトロツコもブレーキをかけ俺達を通り抜けた直後停止した。

そしてトロツコの側面が開いたかと思うと中から男がぞろぞろと出てきた。

トロツコから出てきた事や見た目が泥や土などで汚れていることから多分この坑夫だろう。

「いやびつくりした!何でこんな所に人が!？」

あつと言う間に男達に囲まれ質問責めにあつた。

俺は急いで事情を説明する。

「あの、俺達はこの近くの浜で座礁してしましまして……」

「それでこんな穴蔵に入って来たって訳か!道理で嗅ぎ慣れねえおそとの臭いがするわけだ!」

「泥臭くもねえしな!」

がはははは！と笑う坑夫達、どうやら悪い人達では無いようだ。取りあえずこの事を聞いてみるとするか。

「あの……ここは一体何処なんでしょうか？」

「ここかい？ここは石垣原にあるでつかい穴蔵、坑道さ」

「するとここは九州か…大友領へはすぐか…」

「そうなのか毛利！？」

「ふむ、どうやら運が良かったらしいな」

以外に目的地の近くだったお陰で全員から安堵の息が漏れた。

「水差すようで悪いがあんた達こつから大友の所までの道分かるのかい？」

「あつ………」

その光景を見ていた坑夫の冷静な一言でハツとする。

……地図、無いじゃん。

「……ハハハ！どうやら道が分からねえみたいだな！一応外に道はあるがあれは確か大友領への道じゃ無い上二日三日歩いても宿町が無え」

「じゃ…じゃあどうすれば………」

「俺達に任せな。こんな穴蔵で会ったのも何かの縁だ。来な！この坑道のまとめ役に会わせてやるよ、彼ならおそとの地図の一枚や二枚持つてるかもしれないしな！」

「ありがとうございます！」

「いいって事よ」

俺達は坑夫達が乗っていたトロツコに乗せて貰い穴蔵の奥深くへと

進んだ。

乗っている時に聞いた話だがこの坑道は大阪の豊臣軍の物らしい。そしてそのまとめ役をやっている黒田官兵衛と言つ男も豊臣軍傘下の男でかなり優れた慧眼の持ち主であるらしい。

まあここに来た理由は派遣されたと言つよりも左遷されたと言つた方がいい理由だったらしいのだが……

そして今この坑道は不幸な事が起こりまくっていて自転車操業状態なのだという。その理由は聞いたが話してくれなかった。

「よし、付いたぞ！全員下りてくれ」

どうやら目的地に着いたらしく俺達はトロツコから下りる。

「よし、それじゃあ俺は官兵衛さんに話をつけて来るからそこで大人しく待つてくれよ！」

そう言つて坑夫はどこかへ走つていった。

……それにしても改めて見ると凄い大きさの坑道だ。そこかしこが松明などの明かりで照らされ絶えず男達の声が響く坑夫や鉱石を運ぶ荷車などがひっきりなしに通る道はさながら賑わっている市場の道だ。

そこらにある町よりも活気はあるんじゃないだろうか？

「おーい！官兵衛さんが今すぐ会いたいってさ」

俺達は坑夫の後を追つて行くと周りが溶岩に囲まれた場所へ来た。そこに一人の体格の良い男性が俺達に背を向け丸い鉄玉に腰掛けていた。

その男性はこちらを振り向くとゆっくりと立ち上がりこちらを向いた。

何とその手には枷が付いており鎖が鉄玉に付いていた……まるで囚

人だ。

「来たか、ようこそこんな穴蔵へ……小生は黒田官兵衛、運のつきを掴めない男さ……」

そう言つて黒田官兵衛は手かせを見せつけるようにして笑つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7800m/>

戦国BASARA 転生！北条物語

2011年7月13日21時44分発行